

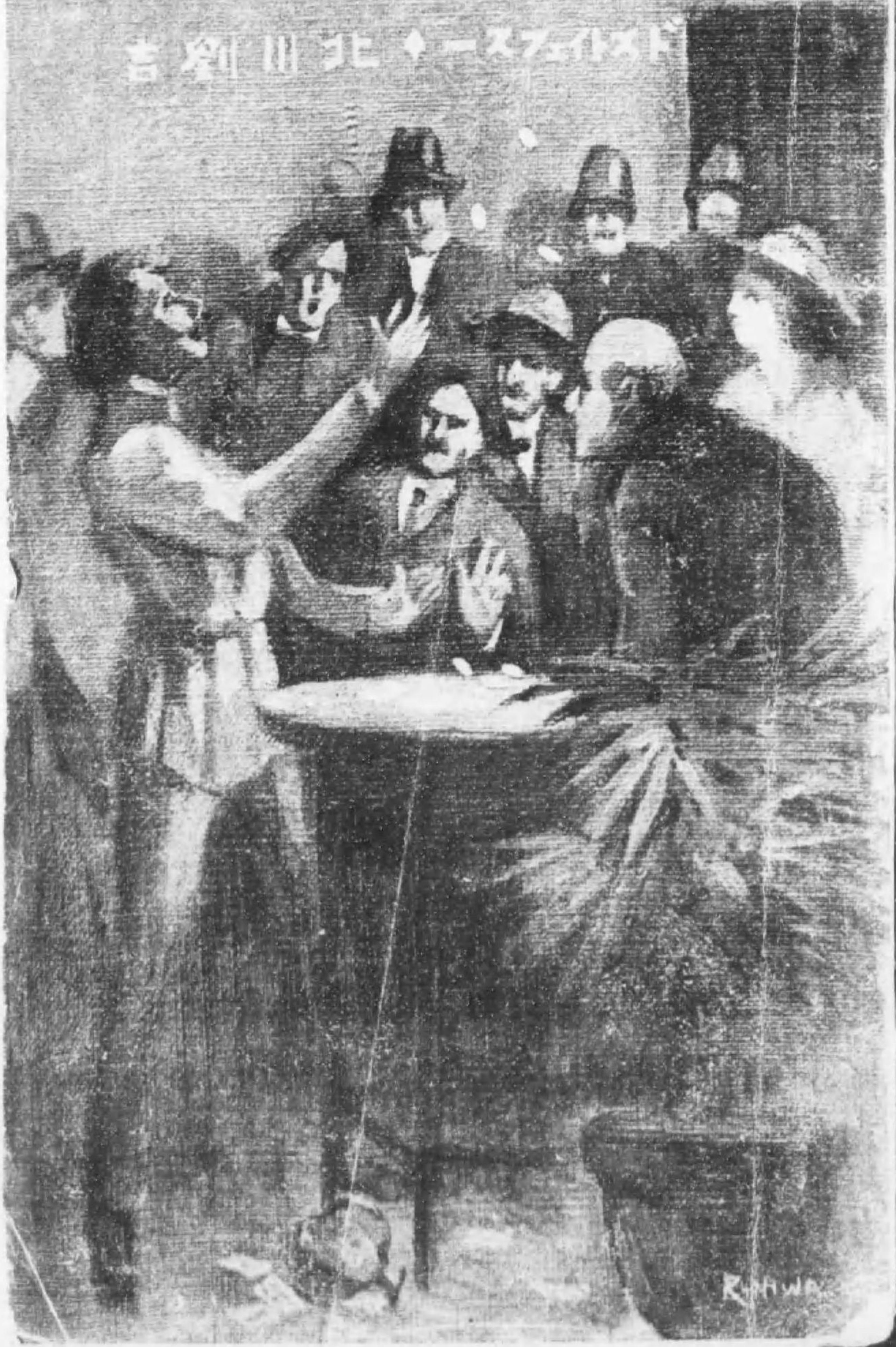


始



第 兄フツマラカ

吉 野 田 北 ◆ ス ー ス 作 者



K. H. W. A.

特114
953

カマゾ兄弟

著 イキス フォイ・トスド

編 吉 劉 川 北

近 代 名 著 物 語 叢 書

上 方 屋 出 版



1923



上卷

- 一 三人兄弟……………三
- 二 無作法な會合……………二
- 三 二人の女……………二七
- 四 破 裂……………六〇
- 五 恐ろしい合圖……………七三

中卷

- 六 一本の葱……………九
- 七 俺が來たんだ……………一三五
- 八 惡魔の仕業……………一八七

下卷

九 貴方ぢやない！……………二五五

十 神の言葉悪魔の言葉……………二九六

十一 誤れる裁判……………三三三

十二 終 結……………三〇三

カラマーゾフの兄弟

北川 劉 吉

(ドストイェフスキイ原作)

上 卷

一 三人兄弟

フヨードル・バプロ井ツチ・カラマゾフはわが縣の有名な地主で、その惨死は今なほ我々の記憶に残つてゐる。彼のロシアに好く見るやうな下劣な、同時に物分りの悪い男だつた。物分りが悪いとは言ひ條、金を貯めることは上手で、最初彼は極めて僅かの地所しか持たないで世の中へ乗りだしたのが、死んだ時は十萬ルーブル以上の金を残してゐた。

彼は二度結婚して、三人の息子があつた。長子がドミトリー、これは最初の妻に出來た子で、第二の妻にはイヴンとアレキセイの二人が生れた。最初の妻はアデレ

イダ・イヴノヴナと云つて、富有な地主の出である。何うしてこんな女がこんな男の妻になつたかはちよつと分らない。とに角大變ロマンチックな氣風の娘で、階級なごを無視して、フヨードルと一しよに駈落をするのが面白かつたらしい。男の方では妻の持參金が目あてだつたことは云ふまでもない。元々そんな譯だから、結婚後は男の缺點ばかり眼について、二人の仲には始終喧嘩が絶えなかつた。しかし、勝氣な女で、殴られるのはいつも女ぢやない、男の方が殴られたといふ話だ。到頭、良人に愛想をつかして、一人の子供を捨て置いて、或る神學生といつしよに駈落してペテルブルグへ出奔した。その後でフヨードルは、それを好い話の種にして、男にとつては不面目なやうなことでまで悉細こまかに話して廻つた。さうした下劣なことがこの男の喜びだつたのだ。——そのうち妻君の居所が知れた。で、ペテルブルグへ追駈けて行かうと云ひながら、實は少しも行かうとはしなかつた。間もなく妻君の方で死んでしまつた。チプスに雇つたためだとも言へば、又、飢れて死んだ

のだといふやうな風説も立つた。
 こんな父親が後に残された子供を何んな風に育てたか？ それは想像に難くない。といつて、彼はその子を虐待したわけではない、ただ忘れてしまつた。すつかり忘れ果ててしまつた。誰一人關ひ手がなかつたから、グリゴリイといふその家に長く仕へた爺の下男が、三つになるミーチャ(ドミトリー)を引取つて育てた。それを好いことにしてフヨードルは勝手な眞似をしてゐた。他人から子供のことを聞かれて暫く何の事か了解し得なかつたやうなふりをした。
 ミーチャはギムナチウムを終らないうちに學校を引いて、士官學校へはいつた。カウカサスへ行つた。決闘をして並の兵隊に落された。それから士官に昇進した。慘殺事件が起つた時、彼は自分の財産に就て父親と商議するために故郷へ歸つてゐたのだつた。ミーチャは自分の分け前がまだ餘程あるやうに誇大して考へてゐた。が、そのことは後に話すことにする。

フヨードルは、最初の妻を失つてから四年目に、ソフイヤのイヴノフナといふ女と再婚した。牧師の一人娘で早くから両親を失ひ、隣縣にゐる富有な貴族のお婆さんの厄介になつてゐた。そのお婆さんは大變氣の短い人で、可愛がつてはくれるけれども、何うも居辛くてならない。そこへ持つて来てフヨードルが好い加減な出任せを並べて誘ひかけたから堪らない、年も若し、隣縣のこととて男の身状は分らない、といふのでつい男の口車に乗せられた。

フヨードルは二度目の妻を娶つてからも相變らず身持ちが修まらず、いろんな下卑た女を家のなかへ引入れたりして妻君を虐待した。で、妻君は二人の男の子を残して、間もなく死んでしまつた。

その事が知れると、例の氣の短いお婆さんは早速やつて来て、二人の子供を引取つて行つた。が、そのお婆さんは間もなく死んだ。そしてその息子といふのがまた親切な人で、幼ない甥たちの教育を身に引受けて育てることにした。上のイヴンは

何方かと言ふと黙りやの氣むづかしい子で、その代り學問が素晴らしくよく出来た。だん／＼生長するにつれて、自分が他人の家の世話になつてゐる身だといふことを感付くと、それを厭がつて、まだ大學に在校中から新聞や雑誌などに寄書して僅かばかりの金を儲け、それで自活するやうにしてゐた。その明晰で深刻な宗教上の評論などは世の注目を惹いて、若手の思想家の一人として彼の名は故郷にまで聞ゆるやうになつた。そして彼は不意に故郷へ戻つて来て、父親の家に同居した。これがドミトリーの歸郷と相前後した頃で、これで三人の兄弟は三人ながら故郷に揃つたことになる。といふのは一番の末のアレキセイはもう前から國にゐたからで彼が二十歳、イヴンが二十四歳、長子のドミトリーは二十七歳だつた。

このアリヨウシヤ(アレキセイ)といふ子は小さい時から人に可愛がられる子で、お婆さんの息子の家でも、殆どその生みの子のやうに可愛がられてゐた。といつて何も人の顔色を見分けたりするのぢやない、それどころか世にも稀な心の素直な子

で、いつも快活だつた。この子を見てみると、誰でもひとりで心が柔かく優しくなるのだつた。それは生れ附きだ。學校でもその通りで、外の子供がいちめても、暫く経くと、すぐにその子と仲よく話してゐる。それがわざと忘れるのでもなければ許してやるのでもない。初めから虐められたとも思はぬのである。只一つこの子供は極端に潔癖で、殊に女の話など出ると直に顔を眞赤に染めた。その事では外の子供たちからさんざん弄りものにされた。この子はまた、兄のイヴンとは正反對で、自分が誰の費用で生活してゐるかなどといふことはてんで氣にもかけない。小使錢などはねだつたことはないが、たとひ貰つても全然氣にも止めない。即座に無くしてしまふか、五六週間も何うしていいか知らないで、その儘持つてゐるといふ性質だ。裸のまま四つ辻の眞中へ捨てられたとしても、この子が食に困ることはなかつたらう。さうした徳が生れながらにして具はつてゐた。

彼はギムナヂユームを卒業する一年前に、不意に國へ歸りたいと言ひ出した。み

んな止めたけれど、何うしても行くといふ。餞別も澤山貰つたが、汽車は三等で行くからといふので、彼は半分返した。故郷へ歸ると、すぐにお母さんの墓へ参りたと言つた。が、父親のフヨードルは自分で一度も参つたことなんかなかつたから勿論その在所は知らなかつたさうだ。お母さんの墓へ参つてから間もなく、アリョーシヤは近隣の僧院にはいりたと言ひ出した。長い間の願ひだからどうぞ是非諾いてくれと願つた。で、父親も承知した。

アリョーシヤが僧院へ入りたいといふ希望を起したのは、兼々からこの僧院にゐる長老ゾシマの徳を慕つてゐたからで、その坊さんは取つて六十五歳、その徳望は縣内は言ふまでもなく近隣に鳴りひびいてゐた。元は富有な地主の生れだといふことで、若い時には戦争にも出たが、一度僧院にはいつてからは固く持戒して、多くの歸依者を持つてゐた。人々は皆ゾシマの許へ自分の罪を懺悔しに行き、助言を願ひに出た。彼は一目見るなり何も言はれないうちから、その相手が何しに來た、

何んな苦しみを心に抱いてゐるかを言ひあてたといふことだ。由來、ロシアの國民殊に農民たちにとつては、始終何物かの前に跪まづいて祈ることの出來るといふことが、何よりのなぐさめだつた。この長老は生きながらの神である。その心の中には萬物再生の秘密を懐いてゐる。地上に眞理を打建てて、萬人が互に相愛し、富めるも貧しきも、貴きも賤きも、生きとし生ける神の子はみんな一つになつて神の王國を建設する、さうした光榮の日を齎す力を、この長老が持つてゐると人々は思つてゐた。さうしてアリヨシヤも亦、百姓たちと同じやうにその信仰を持つてゐた。さて、二人の兄たちがこの町へ着いた時、彼は眞實の兄弟のイヴンよりも、腹達ひのドミトリーと早く仲好しになつた。イヴンに對しても非常に興味を持つてはゐたけれど、ごうしたものが親しくなれない。何だか輕蔑されてゐるやうな氣もする。そんな風だつたので、イヴンがその様に同情心がなく冷淡に見ゐるのは、きつと自分には解らない或る事を考へてゐるからだらうと思つてゐた。

この時に當つて、長老ゾシマは病氣で困つてゐたけれど、強いてその許でカラマゾフ一家の者、親子四人が會合しようといふ相談が持ち上つた。それはフゾールドとドミトリーとの間の財産争ひが、何方も後へ引かないのでなか／＼決着しない。で、徳望の高い長老の許で相談したら案外早く話が纏まるかも知れないといふのだ。アリヨシヤはこの話を聞いて大變驚いた。あんな亂暴な連中がやつて來たら何事を仕出かすか知れたものぢやない、師も定めて迷惑だらうと一時は當惑したが又思ひ返してその儘にして置いた。

二 無作法な會合

長老ゾシマの庵室に於けるカラマゾフ一家の會合は、いはば親族會議のやうなもので、折柄この町へ來合せてゐたフゾールドの先妻の從兄に當るミューソフといふ

巴里仕込のハイカラの小父さんや、その遠縁に當るカルガノフといふ若い士官も列席した。で、又二三の僧侶、ラキーチンといふ神學生等も居合せた。長老の出席を待つ間、フョードルは清浄な僧院の場所柄も顧みず、酒場か青樓と間違へたやうな駄洒落や阿呆口を叩いて仕方がない。いよいよ長老がそこへ出てからも、止めやうともしない。餘りのことにミュージックが注意すると、今度はミュージックに食つてかかつた。

『わしの腹の中には悪魔が棲んでゐるのさ。なに、小つぼけな奴だがね。大きな奴はもつといいお宿を求めよ。君の腹の中だつて祿な奴はゐやしないさ。長老様、わしがこんなことを言つて馬鹿な眞似をしてゐるのは、まつたく心から辱しいからなんですよ。自分で自分が辱しいから尙更おごけた眞似がしてみたくなる。そんなことでもして胡魔化さすにはゐられないんでさあ。あゝあゝ、わしは全く精根まで墮落してた人間だ。長老様、何うしたらいいでせう。何かいい薬はありませんか。い

い薬があつたら教へて下さいませんか。』

長老は微笑んで、『何うなされたらいいか、貴方はよくよく御存じの筈ですちや。貴方は何でも知つていらつしやる。知つてゐて、その様な眞似をしていらつしやるのです。つまり嘘を遣つてゐるのです。嘘をついてはなりません。就中、御自分に嘘をつかれてはなりませんのちや。自分自身に嘘をついて、その嘘に耳を傾ける人は、終ひには自分でも嘘か本當か分らなくなり、自分自身をも他人をも輕蔑するやうになるものですよ。それはよくない事です。又、無闇と腹を立ててみられるのは、面白いことでせうが、それが何よりの毒ですちやて。』

長老の論し方は何時でもこんな風だつた。

やがて定刻が来たといふので、會議は愈々初められることとなつた。人数は既に揃つてゐた。イヴンも来てゐた。アリョーシヤはもとより長老の傍に隨いてゐた。ただ肝心のドミトリーばかりがどういふものか出て來なかつた。あまり遅いので、

これはもう來ないのぢやないかと思つてゐる處へ、彼は遽しく戸を開けてはいつて來た。

『や、ごうも遅くなりました。使の者に二度まで聞きましたけれども、二度とも一時からだといふのでその心算でゐましたが、急に十一時だと聞いて慌てて飛んで参りました。』

かう言つて彼は皆にお辭儀をし直した。ドミトリイの顔を見ると皆は急に改まつた。フヨードルも眞面目になつた。この男は眞面目になると一層人の悪いやうな顔附になる。

座中の人々は又前からの談話を續けた。ドミトリイは一人黙つて片隅に聞いてゐた。が、不意に會話のなかへ口を入れて、

『一寸、御免下さい。』と言ひ出した。『では何ですか、不信者の罪といふものは宥されないばかりでなく、その身の避け難い必然な結果だと仰しやるのですか？』

『左様ですぢや。』と一人の僧侶が答へた。

『私もよく記憶しておきます。』

彼は突然に喋り出したと同様に、又突然に黙つてしまつた。人々は彼の顔を眺めた。

『では、貴方は靈魂不死の信仰の消滅に關して、心からさういふ確信を持つておいでなさるのかな？』と、長老は急にイヴンに向つて訊いた。

『ね、さうです。不死のない所に道徳はありません。』

『左様信じてをられるなら、貴方の幸福です。がまた或は、あなたの御不幸かも知れない。』

『何故不幸でせう。』とイヴンは微笑みながら問返した。

『何故といふとね、貴方は恐らく御自分の靈魂の不滅を信じてはゐらつしやないでせうから——左様ではありませんかな？』

『左様かも知れませんが……併し私は戯談を云つたのではありません。』と、イヴンは妙に顔を赧らめた。

『勿論戯談を言つてをられるのではなからう。問題はなほ貴方の頭の中にあつて、まだ解答を得られずにある。しかしさういふ殉教者は時として失望そのものを享樂するやうになるものです、御用心なさるがいいですちや。』

長老はいよいよ一家の相談を聴きにかかつた。まづフォードルが自分の不平を述べにかかつたが、やはり取りごめもない駄洒落ばかり言つてゐて、少しも真劍によらうとはしない。ドミトリーは齒齧みをした。

『いや、お前たちは皆なわしばかりが悪いやうに言つて責める。』とフォードルが叫んだ。『長老様、お聴き下さい。この男は軍隊にゐる時分、自分の屬してゐる隊長の娘を誑かして、自分と婚約を結ばせたのですよ。その娘は孤兒で、目下はこの町へ來てゐますが、この男はさういふ關係があるにも係らず、その娘の眼の前で、また

他の莫連ものに引つかかりましてな、いや、それがなかなかしつかり者で、何うしてこんな男の言ふことなんぞ聞くものぢやない、そこでいよく血眼になつて、その女を攻め落さうと騒いでゐるんですがね、私と財産争ひまでして金を引出さうとするのも、みんなその女に注ぎ込まうといふ下心あつてのことですよ。』

『黙れ!』とドミトリーが叫んだ。『私の前で、あの淑徳高い娘の名を凌辱すると承知しませんぞ!』

『あれ、まああの調子です。現在の親に向つてあんな口を利きますよ。親に向つてさへあれだから、他人には何をするか知れたものぢやない。この男は何日かも中央料理店の前で、澤山の子供を抱へた貧乏な退職大尉の髯をつかんで、曳きずり廻つて打擲したんですせ。』

『嘘だ! 他所から見たら本當だが、内實は大嘘だ。成程私は大尉を擲りました。けれどもこの大尉はこの親爺の云ひついで例の女の許へ行き、親爺から私の借りて

ある借金の證文を因にして、私を監獄に陥すやうに悪智慧をつけに行つたのですよ。この親爺もその女に気があつて私を嫉いてゐるんです。女は笑つて何も彼も私に話しました。實際、私は今日此處で親爺の前に謝罪して許して貰ひに來ました。それが何うです、この有様は。私は最も親爺だとして許しとくわけにはいかん……」

彼はもう言葉が次げなかつた。眼は輝き息も忙しくなつた。みんな驚いて立上つた。長老ゾシマだけは、さも疲れたやうに眼を瞑つて聞いてゐた。

「こんなことになつたのは、私ども二人ながら悪い。」と、ドミトリイは又言つた。「しかしこんな事にならうとは夢にも知りませんでしたよ。併し考へても見て下さい。現在親が息子を嫉んで、不始末な女を横取りして、監獄へまでその子を入れやうとする。こんな親爺と穩かに相談しようたつて出來ますか、私は瞞されたんです。」

「決闘だ。これがわが子でなけりや決闘だ。」と、フョードルは足を踏み鳴らした。

「あゝ間違つた、私は間違つた。」と、ドミトリイはさも輕蔑したやうに親爺を睨み

ながら低い聲で言つた。「私は許嫁の女といつしよに老親に孝養をするつもりで故郷へ歸つて來た。それに、こんなやくざ親の他に親はない……」

「ふゝん、お前がその許嫁を捨ててあの莫連女を選んだ所をみると、お前の許嫁はあの女よりも劣つてゐると見ゆるね。」と父親は毒々しく嘲笑つた。

「いや、酷い、あんまりだ。」といふやうな聲が傍に立合つた人々の口から出た。

「何うしてこんな人間が生きてゐるんだ。」と、ドミトリイは我を忘れて、かすれ聲で呻いた。彼の顔は憤怒に歪んでゐた。「皆さん、こんな人間がこの世に生きてゐてもいいのでせうかね。」と父親を指しながら、彼は人々の顔を見廻した。

「お聞き下さい、みなさん、親殺しだ、此處に親殺しがゐます。」とフョードルは叫んだ。

「これはもう我慢が出来ない。」と座中の一人が言つた。ざわ／＼と總立ちになつてちよつと何うなるか分らなかつた。處が、思ひがけないことでこの始末がついた。

長老ゾシマは急に自分の座から立上つた。そしてドミトリイの前へ行つて、その前に跪きながら、頭を下げた。アリヨシヤは長老が倒れたのだと思つた。が、實際、彼は町重に頭を下げてゐたので、面喰つて、長老を扶け起すために手を貸すことさへ忘れてゐた。

『左様なら、皆さん御免下さい。』と長老は凡ての客に對して挨拶をしながら、アリヨシヤに扶けられて出て行つた。

ドミトリイはしばらく呆氣にとられて立つてゐた。長老が自分の前に額づく——何の意味か？ 彼は「あゝ神様！」と急に呻きざま、両手に顔を抑へて、その部屋から馳け出して行つた。

一時他の客もびつくりして黙つてゐたが、又ぼそ／＼と呟き出した。そこへ一人の僧侶が来て、別室で午餐の饗應があるから此方へ来て呉れと招待した。フヨードルは流石に、自分だけは辭退して家へ歸ると言つた。其他はイヴンをはじめ一同僧

院の客間へ移つた。

一方アリヨシヤは長老を扶けて居間に伴れて行き休息させたが、長老は少し落着くとすぐにアリヨシヤに向つて、『俺はもういいから彼方へ行かつしやい。饗應の座で皆が待つてゐるよ。』とすゝめた。

『何卒お慈悲にここに置き下さいまし。』とアリヨシヤは願つた。

『いや、ここに用はない。ここは將來お前のゐる處ぢやない。神様の思召に従つて僧院を去るがよい。』

アリヨシヤはびつくりした。

『何をそんなに驚く。お前は世の中へ出てもつと世間を見て來なければならぬ。お前は妻をも娶るだらう。世の中でお前のしなればならぬことは澤山ある。わしはお前を信じてゐるから、お前を世の中へ歸すのだ。お前は澤山な悲しい目にも遇ふだらう。しかし、その悲しみの中にあつても、お前は幸福だよ。それがお前の使命

なのだ。』

アリヨシヤの顔は苦しげに見わた。唇の隅がふるわた。

『何をまたそんなになげく。』と長老は優しく言つた。『何處へ行つても神様を忘れるな。お前の兄弟たちの前にゐてやれ。一人の味方になるのではない、二人の味方になつてやるのじやぞ。さらばじや。』

アリヨシヤは心を残しながら、しほしほと出て行つた。外へ出ると、ある富裕な貴夫人がそこに待ち合せてゐて、アリヨシヤを片蔭へ呼んだ。そしてカテリーナから言傳つて來たと言つて一封の書面を手渡した。カテリーナといふのはドミトリイの許嫁の女である。思ひがけないことだつたので、アリヨシヤは急に心がざわつき出した。見ると、是非一度お目にかゝつて、大切なことについて御相談したいから、一度訪ねて呉れといふ文言である。彼はいよいよ當惑した。が、例の優しい心から、貴夫人に向つて承諾の旨を答へた。そして饗應の場に急いだ。

小徑の曲り角で、彼は神學生のラキーチンに追付いた。

『おい、長老は何と思つてあんな真似をしたんだらうな。』とラキーチンは皮肉な笑を泛べながら言ひ出した。『あれは何だよ、あの長老は鼻が利くから、何か罪惡を嗅ぎ出したんだね。で、今後君の家に何か事が起つた時、豫言者の名譽を博さうといふんだよ。それだから人殺しの足許に跪いたのだよ。』

『人殺し？ 君は何を言ふんだ？』と、アリヨシヤは眞蒼になつた。

『如何して？ 君だつて、そんな事位前から氣がついてゐさうなものだね。』

『ふん、氣がついてゐたのか、そいつは不思議だ。』とラキーチンは意地悪く出た。『兎に角君の家は皆色慾の徒だよ。君が今迄純潔にして來られたのが不思議な位だね。親子兄弟三人、互に牙を研いで他人の隙を窺つてゐる。』

かう言つて彼は、今度はドミトリイがどうしてもグルシエンカといふ女から離れ

られない所以を説きはじめた。色慾を解するものは、女の身體の一部、例へば足だけにも惚れることが出来るといふのである。彼はなほ、イヴンがカタリーナを誘拐しようとしてゐる、おまけにドミトリイの方でもグルシエンカに走るために、却つてそれを便宜にしてゐるなごとも告げた。『何しろ一文なしのイヴンが持参金附の女を手に入れりや、都合は悪くないからね。女の方でも近頃は十分ぐらつてゐるやうだよ。』

『如何してそんなに詳しいことまで知つてゐるんだ。』と、アリョーシヤは訊き返した。『は、君が氣を揉むところを見ると、僕の言つたのは當つてゐるね。』とラキーチンはせせら笑つた。實は、ラキーチン自身カタリーナに氣があつて、イヴンを戀敵にしてゐるらしい。

『あ、君はグルシエンカの親類だつて言ふから、それで何もかも聞き出して來るんだね。』と、アリョーシヤは何氣なく言つた。

ラキーチンは僻んだ心からこれを侮辱と取つた。『君は何をいふのだ、とんでもない話だ。……だがあの女なら、今に君の兄さんかでなきやお父さんが、君の親類にしてくれるだらうよ。』

此時、不意に食堂の邊りで騒々しい物音がした。二人はそちらへ駆け附けた……話はもとへ戻るが……。饗應の場では、親類のミュージックが一同に代つて挨拶をした。そして、折角お招きに預つたフヨードルがこの席へ出られないのは誠に申譯がないなごど表向きな挨拶をしてゐた。其處へ今來られないと言つた當のフヨードルがひよつこりと顔を出した。彼は一旦歸るとは言つたものの、何うしても家へ歸る氣になれないので、馬車を待たして置いて又やつて來たのだ。

『諸君!』と、彼は闖の上に突立ながら叫んだ。『貴方がたは私が歸つたと思つたでせうね、ところがわしはほら、この通り……』

几帳面なミュージックはこんな仕草には堪わられないやうな氣がして、怒鳴りつけ

た。怒鳴られたりすればするほど一層調子づいて聲高に喚きたてるのがフヨードルである。彼は滅茶苦茶に喋舌りまくつた。終ひには寺院や僧侶の悪口まで言ひ出して、

「へ、へ、寺院が何だ、坊様が何だ、露西亞の百姓どもが汗水たらして儲けた金子を家族ごもの手から捻ぢとるやうにして持つて来るのだ。お前たちは人民の汗で肥つてるのだ。人民の血を嘔つてるのだ。」

かう言つて、皿小鉢の載つた食卓を引つくり返した。一同又總立ちになつた。フヨードルは愈々狂氣のやうになつた。そして遠くから、駈けつけて来たアリヨシヤの顔を見ると、いきなり呼びかけて、

「こりや、アリヨシヤ、お前も今日は家へ歸るのだ。枕も蒲團も引かかへて来い。此處にお前の匂がしても承知せんから。」

到頭今まで黙つてゐたイワンが立上つた。そして親爺の手を把りながら引摺るや

うにして、馬車の側へ連れて行つた。

「さア走らせろ。」と彼は馭者に向つてふん／＼怒り乍ら叫んだ。フヨードルは馬車の中でもまだぐ／＼言つてゐる。「お前ぢやあないか、今度の相談會はお前が仕組んで、お前が言ひ出したんぢやないか、それに今は……」

「貴方はもう大分饒舌つた。もう黙つてもいいでせう。」

イワンは苦りきつて、家へ歸るまで一口も物を言はなかつた。

三 ふたりの女

カラマゾフ家にはグレゴリイといふ老僕があつて、垢丸けにして打捨つて置かれた長男のドミトリーを引取つて、自分で水を浴びさせて、有合せの襦袢を着せて育てた、次にはイワンもアリヨシヤの面倒をも見た——そのことは前にも書いた通

りだ。グレゴリイと、彼の妻のマルファとの間には一人も子がなかつた。ただ一人有りは有つたが、指を六本持つて生れた。グレゴリイはそれを神様の罰のやうに思つて、見るのさへ厭がつた。が、十四日目に死んだ時には泣いて自分で墓場へ埋めに行つた。

丁度その子を埋めた晩である。物置の方で赤ん坊の泣く聲がした。マルファは怖がつて夫を起した。何だか女の呻くやうな聲も聞える。グレゴリイは着物を着て、提灯を持つて出て行つた。マルファも口のうちにでお念佛を申しながらそれに續いた。物置の戸を開けてみると驚いた。町の乞食女の、綽名リザエータ・スメルチャーシチャ(臭い女)といふ莫迦女がそこにお産をしてゐたのである。女は既に死んでゐた。リザエータについては話があつた。この女は夏でも冬でも布子一枚の獣のやうな服装をして町中をうろつき廻つてゐたが、白痴だといふので皆から可愛がられた。綺麗な着物を貰つてもすぐにどこかへ脱いで来て、矢張元の布子を着てゐる。錢を貰

つてもすくにお寺の賽銭箱へ入れてしまふ。パンと水ばかり食つて生きてゐたのである。

ある夜酔拂ひが五六人がやゝ騒ぎながら町端れの道を歩いて来た。見ると向ふの垣根の下にリザエータがしごけない風をして寝てゐる。酔つ拂ひ共はそれを見て笑ひ乍ら淫らな事を言ひ合つた。その中に一人が「何うだい、何んな物好きでもこの獣を女にしてやるだけの酔興のある奴はなからうね。」と言つた。その中にフョードルも交つてゐたが、それを聞くと例の癖でしやしやり出して、「うんにや有る。斯ういふ女を手を掛けるといふことは、又一種びりつとした味のあるものだよ。」と言ひ張つた。皆顔を背向けた。そして、「そんな事が出来るものか、出来るならやつてみる。」と、笑つてその場を立去つた。フョードルもその時皆と一しよに立去つた。後では云ひ張つたが、兎に角五六ヶ月経つとその女の腹が膨れ出した。勿論女に訊いたとて、相手の知れるものぢやない。町の評判では皆フョードルを指してゐた。

グレゴイはその子をも育てることになった。バベルといふ名も附けてやつたが、人々はみんな、フョードロピッチ(フョードルの息子といふ意味)・スメルヂャーコフと呼んだ。この兒はもう一人前の男になつて、フョードルの二代目の家僕になつた。そして、グレゴイやマルファといつしよに住んでゐる。彼は料理番の役を勤めてゐた……

話變つて、アリヨシヤは父親が寺から歸つてから、饗應の場での一部一什を聞いて途方に暮れたが、兎に角父親の許へ行つてみようと思つた。途中でカテリーナから招ばれてゐることを思ひ出したが、これは後廻しにすることにした。カテリーナは美しい、氣位の高い、激しい氣象の女だつた。自分を捨てたドミトリーをば寛大な心から許して救はうとしてゐることも、アリヨシヤは知つてゐた。けれどもこの女に會ふと、彼はどういふものか怖ろしい氣がした。心の底が知れない氣がした。

彼は近道をして裏町から父の家へやつて來た。そして、將に彼は、その裏門を這入らうとした時、隣の貧乏な寡婦の家の垣根の中から、ドミトリーが手招ぎをしてゐるのを見かけた。

「や、丁度いい處で逢つた。俺はお前のことを考へてゐた處だよ。」とドミトリーは内密話のやうに聲をひそめて言つた。「その垣根を越して、此處へ來てくれ。」

彼はアリヨシヤを扶け上げて、庭の隅の方へ伴れて行つた。

「俺はここに隠れて見張つてゐるんだよ。その譯は後で話すがね。なに、お前は又わしが酒を飲むといふんだね、これは飲むのぢやない、飲まれるんだよ。兎に角お前が來てくれたのは嬉しい。實際俺はお前が好きだね。抱きしめて、潰してやりたい程に思つてゐるんだよ。」

彼は本當に心から嬉しさうだつた。

「わしはお前とあの女しか愛しない。あの俺の惚れてゐる女だよ。併し惚れてゐる

「こいふことは愛することぢやない。惚れてゐてもその女を憎むことがあるんだよ。俺は今崖から淵の中へ眞逆さまに落ちようとしてゐる。しかし俺は怖いとは思はない。いや、怖いかも知れないが、又それを楽しんでゐる。楽しむどころか法悦に入つてゐるよ。だがお前は何處へ行くのだい？」

「私はお父さんの所へ行きます、それからカテリーナの所へも始めて伺はうとしてゐるんですよ。」

「なに、あの女の處へ、又親父の處へ。そりやあ好い。丁度俺も其處へ使に行つて貰はうと思つてゐた處だ。」

「私を使にやるのですか。」

「あゝ、お前だよ、俺はもうお前の外には手頼に思ふ者はない、ごうぞ聞いてくれ、俺の話を聞いてくれ。」

かう言つて、彼は不意に軍隊で習つた感傷的な歌を唄ひ出した。唄ひながら手に

持つた罌の酒を呷つた。

「もう歌はいい、充分だ、わしは泣くよ、泣かしてくれ、莫迦な話だね、みんな笑ふだらうよ。併しお前だけは笑はないね。なに、お前も泣いてくれるのか、もう可い、もう可い。」

そして彼は、ややあつて話し出した。イワン以外には誰にも話したことのない話だど前置きをして話し出した。アリヨーシヤは懸命に耳を傾けた。

——彼が歩兵隊の中尉をしてゐた頃のことだ。聯隊長の大佐には二人の娘があつて、上の方の娘とは彼も親しくしてゐたが、下の娘はベテルブルグの女學校に寄宿してゐた。それがカテリーナ・イヴローノヴナだ。今度學校を卒業してその町へ歸つてくるこいふので若い士官たちは大騒ぎをした。けれどその女が餘程氣位の高い女だといふので、ドミトリーは氣に喰はなかつた。彼は寄りつきもしなかつた。ところが、ある時彼は友人から妙な噂をきいた。聯隊長が聯隊の金を四千五百ルー

ブルばかり使ひ込んで、それが陸軍省へ聞か、近々聯隊長の更迭を見ることになつたといふのだ。その噂がばつと擴まると町の者全體は聯隊長とその一族とに急に冷淡になつた。ドミトリーは不圖あることを思ひついた。といふのは、丁度彼の許へ父親から、これが最後のお前の財産だといふ文面で六千ルーブルの金を送つて來たばかりの時だつたが、彼はにたりと笑つて、聯隊長の邸へ出かけて行くことにした、そして心易くしてゐる上の娘に逢つてかう言つた。「貴女のお父さんを救ふために、もし貴女の妹さんがこつそり一人で私の宿へおいでになつたら、私は四千五百ルーブルあの方に差上げますよ。そして誰にも言ひますまいよ。」娘はぶんぶん怒つて、「まああなたは酷い人ですね、そんな事がよく言はれますね。」といひ棄てて其場を立去つた。處が、噂は本當だつたらしく、急に新任の聯隊長が赴任して來た。或日先の聯隊長はピストルを自分の咽喉に當てがつてズドン！とやつた。幸ひに彈丸は外れて命に別條はなかつた。命は取とめたが金は出ない。事務の引繼ぎをすべき

日は明日に迫つてゐる。その晩のことだ。カテリーナはドミトリーの許へ忍んで來た……

「兄さん、あなたは本當の話をしてゐるんですか？」と、アリョーシヤは昂奮して、口を挟んだ。

「本當だとも。で、第一俺の心に泛んだのは、矢張カラマーゾフ式だ。俺は百足が俺の腹を咬んでゐるやうな氣がしたよ。俺はあの女を見上げ、又見下した。お前も知つてるだらう、あの女は美人だよ。而もその時は父の爲に犠牲になるといふ精神から何處か神々しい處さへ見えたよ。それに俺は何だ。俺は南京虫ぢやあないか。あの女はその南京虫の掌中にある。俺の心の儘に何うにでも出来る。俺は隠さず言ふがね、腹の中から込み上げてくる卑しい心のために息が詰るやうな氣がしたよ。何うだい、俺は明日の朝この女の家へ行つて結婚を申込みさへすれば、誰にも知れずに、誰にも疵が附かずに濟むぢやないか、が、同時に別の聲が俺の耳に囁い

た。若し明日結婚を申込んだ時、この女が拒絶したら何うだらう。戸口から馭者に俺を追出させて、「さあ町中ふれ廻すならふれ廻しなさい。私はあなたなど怖れてはゐませんから。」さう言つたら何うする？ 俺は女の顔をちいつと眺めた。この女の事だからそんな事位やり兼ねない。俺はむら／＼と腹が立つた。一つ俺も車夫馬丁のやうな態度に出て、かう言つてやつたら何うだ。「なに、四千五百ルーブルですつて！ 御戲談ものでせう。せめて二百ルーブル位ならどうにかしませうがね。今時四千五百ルーブルの金を氣紛れで捨てるやうな男はありませんよ。何か聞き違ひぢやありませんか。」かう言つてやれおそれでお終ひだ。女は無論逃げ出すだらう。が、復讐としてはこれ位痛快なものもないね。俺はこの悪戯のために生涯後悔しても關はない。實際その時は心底から女が憎かつたよ。二三秒間女の顔を睨めて立つてゐた。が、その憎みは狂氣のやうな愛から髪の一筋しか離れてゐない。——俺は窓の傍へ行つて冷たい硝子に額を押附け乍ら黙つてゐた。今でも火のやうな額に

くつついた氷のやうな硝子の冷たさを覺てゐる。が、心配するな。俺は永くその女を放つて置かなかつた。ぐるりと向き直ると、机の傍へ行つて抽斗から五千ルーブルの銀行手形を取出した。それから黙つてそれを女に見せて、二つに折つて女の手に渡した。そして廊下の戸を明けて一歩後へ退り乍ら、女の前に叮嚀な辭儀をした。可いかい、本當に叮嚀な辭儀をした。女は身體中顫れて一瞬間私を見詰めてゐたが、見る見る眞蒼になつた。實際紙のやうに蒼くなつた。そしてゆる／＼と俺に跪いた。生意氣な女學生流のお辭儀なんかぢやない。本當にロシア式のお辭儀だよ。と見ると、急に起き上つて駈け出して行つて了つた。俺は腰に劍を附けてゐたがね、何と思つたかその場で自分を刺さうとした。何ういふ譯だか自分でも知らない。莫迦げた話さね。だが思ふに、それは嬉しかつたからだよ。人間は嬉しくつても死ぬるものだが解るか。併し俺は死ななかつたさ。唯、抜いた劍の先に接吻して、又元の鞘に納めたよ。時に俺はあんまり自分の豪らさうな話ばかりしたやうだ

ね。が、それはどうでもいい、俺とカテリーナとの關係は、ま、そんなやうな次第さ。」

かう言つて彼は汗を拭つた。

「で、前半は解りました。」とアリヨシヤが言つた。

「前半は喜劇で彼處に演せられ、後半は悲劇で此處に演せられた。」

「後半については私は何も知りませんよ。」

「その事があつてから、俺はあの女の事については熟んだとも潰れたとも聞かなかつた。ある日女中が女からの手紙を届けて寄越したが、中には剩錢がはいつてゐる許りで一言の文句も書いてない。聯隊長が使ひ込みの四千五百ルーブルを提供したので、皆は驚いた。が、間もなく大佐は脳病で死んで了つた。カテリーナとその姉とはモスコウへ立つて行つた。立ち際にカテリーナは鉛筆の走り書で、「向ふから手紙を差上げます」とだけ書き遺して行つた。モスコウに着いてからの女の運命は走

馬燈のやうに變轉した。近い親類のある將官の寡婦の後嗣になつてゐる姪が死んだので、急にカテリーナの許へお鉢が廻つて來た。寡婦さんはあの女を後嗣にすると同時に、先づ十萬ルーブルを自由に使ふやうに呉れた。俺はだし抜けに五千ルーブルを送られたのでびつくりした。あとから約束通り手紙が來た。あの女が俺の妻にならうといふんだよ。「私は狂氣のやうに貴方を愛する」といふんだ。「貴方が私を愛しなくとも關はない。私の夫になつて下さい。私は貴方を妨げようとは思はない。私は貴方の足の下の毛氈になりたい。私は一生貴方を愛して、貴方を墮落の淵から救つて上げたい。」俺は承知した。が、俺にはそんな値打はないのだ。俺は一切の事をイヴンの許へ知らせせてやつた。なに、お前は變な顔をするね。そりやイヴンはその女を戀するやうになつたさ。あの女もイヴンを尊敬してゐるよ。成程俺は莫迦な事をした。併しその莫迦な事が俺を救つてくれるよ。」

「でもあの女は兄さんのやうな男が好きなんです。イヴンぢやありません。私は固

くさう信じます。』

『なに、あの女はあの女自身の善行を愛してるのさ、俺を愛してるのぢやない。』突
然ドミトリーは我ともなく、殆ど毒々しい調子でかう口を迂らした。彼はからから
と笑ひ出したがその目がきらきらと光つた。眞赤になつて、拳を固めて力任せにあ
たりを殴りつけた。『俺は誓つて言ふぞ、アリョーシヤ。俺はこんなことを言つてあ
の女の高い情操を笑つた。併し俺の魂があの女のに比べて百萬倍もやくざだつて事
は、自分でもちやんと承知してゐる。あの人のさうした立派な感情は天使のやうに
眞面目なんだ。が、そこに悲劇があるのさ。俺は許嫁だとはいふものの、俺のやう
な者が選ばれて、イワンのやうな男が拒絶されるとは何事だ。あの女が感謝の念か
ら一生を犠牲にしてゐるからだよ。併し結局の詰りは、俺は溝の底へ落ちて、あの
女はイワンと結婚するのだ。』

『併し兄さんは婚約がしてあるのでせう。女の方で別れないと言へば仕方がないぢ

やありませんか。』

『そりやあ婚約は立派にしてある。又あの女も無理にも俺の精神を改めさせようと
してゐる。が、何を言つたとてもう駄目だ。俺は今日お前をカテリーナの許へ使に
やつて……』

『何ですご?』

『俺は再びあの女に會はない、何卒御機嫌よくと言つて貰ふのだ。』

『それで兄さんは何處へいらつしやるつもりです?』

『溝の中へさ。』

『それはグルーシヤのことですか。それではラキーチンの言つたのは本當だつたの
か。』

そこでドミトリーは、今度はグルーシヤとの關係を話し出した。『親爺が大尉を
使にして、グルーシヤに借金の證文を渡して俺を告訴させようとした時、俺は彼奴

を殴りに出かけた。俺は彼奴と、今病氣で寝てゐる金持の老ぼれ商人との關係も知つてゐる。高利の金を貸したりする慾張りで非道な女だといふことも知つてゐる。が、……俺は一目あの女を見た時、もう厄病に取憑かれたやうな氣がした。今こそ俺は一文無したが、その時はある關係で三千ルーブルの金を懐中してゐた。俺はグルーシヤを連れて、此處から五里隔つた、モークロエの町に行つた。飲めや騒げの大騒ぎで、三日の間に持つてゐた金を皆ふいにした。併しそれで何れだけの報酬を得たか？——俺は唯あの女の踵に接吻させて貰つただけさ。」

『兄さんは本當にあの女と結婚するつもりですか。』

『向ふで承知してさへ呉れりや直ぐにでもするさ。承知してくれなくとも同じ事だ。俺はあの女の門番にでもなるよ、アリヨシヤ！』と、ドミトリーは相手の肩を捕へて、力をこめてゆすぶりはじめた。『お前は無邪氣だから何も知るまい。全く狂氣のやうな熱病だよ。俺があの女を殴りに行つた朝、カテリーナは内密で俺に三千ル

ーブルを渡して、モスコウにゐる姉の許へ爲替を組んでくれと頼んだ。俺は金子をモークロエで費ひ果したのだ。俺は今お前を使にしてカテリーナの許へ再びお目には懸らないと言つてやるが、肝心の金は返せない。」

『兄さん、貴方は不都合ですね。本當に！でも兄さんが自分で考へてるほどではありませんよ。あまり絶望なすつちやいけません。』

『何だお前は、俺が三千ルーブルの金を手に入れなかつたら、ピストル自殺でもすると思ふのかい！そこなんだよ、俺は決して自殺はしない。今は勿論しないが、その中に或は……併し今はグルーシヤの所へ行くんだ……俺の一生はどうならうと構はない！』

『あの女の所でどうするんです？』

『あの女の亭主になるんだ。配偶にして頂くんだ。若し情夫が出来たら次の間へ外してやる。そして女の知人の靴も磨いてやらうし、湯沸の火も吹かうし、使ひ走り

も厭やしない……兎に角お前は今日中にカテリーナの許へ行つてくれ。その前にまづ親父の處へ行つてくれよ。」

「お父さんの處へ？」

「あゝ、親父の許へ三千ルーブルを貰ひに行くんだよ。そりやあ親父は逆も呉れやあしないさ。併し俺の母の持參金二萬八千ルーブルを資本にして十萬ルーブルにしたのだ。その中の三千ルーブル位くれたつていい。」

「何と言つたつてあの人はとてもくれやしまんよ。」

「それは俺も分つてゐる。それに親父もあの女に夢中になつてゐるのだから、俺があの方に接近する爲の金と知つたら猶更呉れやあしなからうよ。そればかりぢやない。俺は親父が五日も前から三千ルーブルの金を大きな封筒に入れて封印をしてるのを知つてゐるよ。その上には「戀しきグルーシャよ——若し我に來るならば」と書いてあるさうだ。その金の在處はスメルチャーコフの外に誰も知らない。で、親

父はもう三四日もあの女の來るのを待つてゐるんだよ。あの女も大抵來ると言つたさうだ。で、お前も俺がかうして隠れて見張りをしてゐる譯が分つたらう。」

「ぢやあかうしてゐらつしやることはスメルチャーコフの外に誰も知らないのですね。お金のこともやはりあれからお聞きになつたのですね？」

「さうさ。そりやあ大秘密だよ。イヴンでさへそんな事は知らない。それに親父は林の材木を賣るためにイヴンをチエルマシニヤの町へ使にやらうとしてゐるんだよ。詰りその留守にあの女を引入れようといふんだね。兎に角、お前は親父に金の事を話してみてくれんか……」

「はゝ、話すには話してみます。が、あなたは此處に待つていらつしやるのですか。」

「俺は四時間でも五時間でも六時間でも七時間でも、夜中まででも待つてゐるよ。」

「その間にもしグルーシャが來たらどうなさいますか？」

「グルーシヤが来たなら、俺が飛び出して家の中へ入れんやうにするさ。」

「で、若し……」

「若しも糞もない、そんな事になりや殺して丁ふさ。」

「誰をです？」

「そりやあ親父さ。俺はあの女は殺さないさ。」

アリヨシヤはふと兄が狂氣になつたやうな氣がして、その顔を見やつた。そして、心を残しながら家の中へはいつて行つた。

丁度晝飯後で、珈琲が出てゐた。フヨードルはいつも食事のあとでブランデーを飲むことにしてゐた。部屋の外まで父親の高笑ひが聞けた。

「やあたうどう来たね。」とフヨードルは嬉しさうに叫んだ。「何うだ一杯飲まんか。」

アリヨシヤは酒を謝した。

「やあ心配するな、お前が飲まなきやわしが飲む。」

スマルヂヤークは傍に立つて給仕をしてゐた。この男は今年二十四になつた。始終一物ありげに黙りこんでゐて、他人とは交際はなかつた。が、臆病かといふにさうではない、却々傲慢で他人を蔑視してゐた。前にも言つたやうにグレゴリー夫婦の手に育てられたが、夫婦は毎日此兒は恩知らずだと言つてゐた。小さい時から遊び事にも、猫の首を絞めては、その後でお葬ひをしてゐることが好きだつた。一度グレゴリーがそれを見つけて散々殴つたら彼は一間へ籠つたまま一週間も飯も食はずにしやがんでゐた。十二歳の時から聖書を教へにかかつたが、どうしても莫迦にして覺わぬ。此時もグレゴリーは蹴どばした。すると、彼は癲癇の發作を起したが、その後毎月一回位づつ時を定めずこの發作を起すやうになつた。彼はやがてモスコウの町へ料理の修業にやられた。數年経つてこの町へ歸つて来たが、この時は小ざつぱりとした服装をしてゐた。が、やはり人交際はてんでしなかつた——がやくと食後の會話は騒々しかつた。フヨードルは一人でちびりちびり……とブラン

デーを舐めながらにここにこしてゐた。しまひには例によつて女の話を持ち出して、『女にはごんな女にでも取柄がある、俺はまだ一人だつて女といふ女を醜いと思つたことはない。』と言ひ出した。こんな話から、二人の子供の前で、生みの親の話をした。母親の話が出てからアリヨシヤの顔色は段々變つて來た。顔は眞赤になつて、眼は輝き、唇は震れた。フヨードルはそんなことには氣がつかないで、馬鹿話をつつめた。あの狂人ぢみたお母さんがあゝした、かうしたといふやうな話を一繰返した。アリヨシヤは手を絞つた。顔を兩手に隠した。ヒステリー性の激しい發作に慄へながら、ごつたりと椅子の背に倒れ込んだ。皆は驚いた。水を持つて來たり、顔を冷やしたりして、家内中大騒ぎをしてゐる時、戸の外で喧ましい物音が聞けた。ドミトリーが部屋の中へ躍り込んだのである。

『彼奴が俺を殺しに來た！ 殺しに來た！』と、フヨードルは顫へ上つた。

ドミトリーは自分を支へるグレゴリイやスメルチャーコフを突飛ばし乍ら、『あの女は此處にゐるのだ、確に此處へ來るのを見掛けた。女に何處にゐる？ さあ、女を出せ。』と嘯鳴つた。

女がこの家にゐると聞いて、フヨードルは急に元氣づいた。

『なに、女がこの家にゐる。』と叫び乍ら、彼はドミトリーの後から駆け出した。その様を見るとドミトリーは、『わい邪魔な！』と言ひ乍ら、老人を蹴飛ばした。老人が倒れた上を幾度も足で踏みつけた。

『狂人！ お前は親父を殺すのか？』とイワンが叫んだ。

『當り前だ。今度死ななきや、又來て殺してやる。』と、ドミトリーは息も切れ切れにわめいたが、アリヨシヤから、確に女が此處へ來なかつたと聞いて、やつと我に返つたやうに、『それぢや、もう親父に金のことは頼んで貰はなくともいい。只カテリーナの許へ行つてくれ。きつと今日中に行くのだよ。』と言ひ棄ててその部屋

を駈け出して行つた。グルーシヤの許に行くのである。

後で、兄弟の者は、息が絶れたやうになつてゐる父親を寢間へ連れ込んで、下男に指圖をしながら、それ／＼手當をした。

『莫迦な、俺が止めなかつたら、彼奴は親父を殺す處だつたよ、こんな爺を殺すのに雑作はないからね。』とイヴンが低い聲で囁いた。

『まあ飛んでもない！』とアリヨシヤが叫んだ。

『何が飛んでもないんだ。』とイヴンは毒々しく顔を歪めながら囁いた。『毒虫が毒虫を咬み殺すのだ——結局、両方とも其處へ行くんだよ。』

アリヨシヤはぎくりとした。顔が上がつた。が、兎に角父親も落着いて寝てゐる様子なので、カテリーナの許へ出かけることにした。

カテリーナの家でも彼を待つてゐたとみわけて直ぐに客室に通された。すぐに彼女がやつて来て、両手をアリヨシヤに差し出しながら、

『たうとうあなたも来て下さいましたね。私は貴方にお目にかゝれば、何も彼も解るやうな氣がして、本當に貴方を待つてゐましたよ。』

『私は——私の兄の使に参りました。』

さうして、彼はドミトリイの言傳を傳へた。が、カテリーナは、ドミトリイが昂奮してそんなことを言ふのだと思つて眞面目に取らない。そして、彼が金の事で心配してゐると聞いた時は、許嫁の自分に他人行儀なことだと言つて、大變口惜しがつた。が、アリヨシヤから、ドミトリイが例の女の許へ駈付けて行つたと聞いた時は、急に神経質らしく笑ひ出した。

『いゝね、あの人は逆もあの女と結婚は出来ませんよ、あの人が結婚しようと思つても女の方で承知しない。あの女はいい人です。私はあの女と仲直りをしました。』

アリヨシヤさん、私はあなたに御紹介する人があります。』
かう言つて、彼女は次の間へ手招ぎした。

「私はカーテンの後で呼んでいたゞくのを待ち兼ねておりましたのよ。」と、砂糖のやうな甘い聲がして、一人の女が次の間から出て来た。他でもない、グルーシャ自身である。アリョーシャは眼を瞬つて、ちつと女の顔を見つめた。あの獸のやうに言はれる女がこれか。普通の美しい、單純な女といふ他に變つた所はない。身丈はカテリーナより稍低かつた。カテリーナが圖抜けて高いのである。併し豊かな髪といひ、緑灰色の眼といひ、途中ふと群衆の中で出逢つても、永い間忘れられないやうな顔であつた。特にその特徴は、身體の舉動の柔か味と、色つばいことと猫のやうに音のしない事である。非常に美しい女ではあつたが、その美しさは三十歳迄は保つまい。三十になる前に額や眼の周りに皺が寄つて、顔の肌理も粗くなる。つまり瞬間の美、飛ぶやうな美しさなのだ。

「アリョーシャさん。」とカテリーナは云ひ出した。「私共ははじめて會ひました。私が會ひたいと云つてやつたら、此方の方からすぐに來て下さいました。そして何

も彼も話して下さつて、私はやつと安心が出來ました。」

「あなたは私のやうなものを輕蔑もなさらないで、ありがたう御座いました。」とグルーシャは矢張り甘わたやうな聲で云つた。

「あなたを輕蔑する？ そんなことが出來ますものか。あなたは天使です、わたしは一度あなたの下唇に接吻したい。この方はね、矢張り婚約の男の爲めに苦勞なすつたのですよ。その男はこの方を捨てて、他の女と婚約したのですが、今では後悔して妻も亡くなつたので、近々歸つて來るのださうです。さうすれば、この方も幸福になるのですよ。世間ではこの方ばかりをわるいやうに云ひますが、事情をうかがつてみれば無理もない。さあ御覽なさい、わたしはこの方に接吻しますよ。」かう云つてカテリーナは三度グルーシャの手に接吻した。アリョーシャはそれを見ながら、なんだかわざざらしい、餘りに喜びが過ぎるやうな氣がして、一種の不安を感じた。

『そんなことをして下さつては、私は顔が赤くなりますわ。私はいけない女なので。』とグルーシヤは本當に顔を赤らめながら云つた。『私は冗談にドミートリイを迷はしたのですよ。』

『でも、あなたはドミートリイを救つて下さるのでせう。あなたは私にさう約束したのでですよ。』

『いいねお嬢さま、私何にも約束なんかしませんわ。じきに私の心は變るのです。そら、私はこんなにいけない女でせう。ねね、私のも一度ドミートリイを迷はしますよ。實際私はあの人を好いたのです。まる一時間の間ずっと氣に入つてゐたことがありますわ。』

『さつきのあなたのお言葉とはまるきり違ひますのね。私もそんなことは知らなかつた。』

『ねね、私はいけない女ですわ。もうわかつたでせう、どうぞあなたのお手をかし

て下さいな。あなたに三度接吻していただいた代りには、私は百べんも接吻しなければなりませんのね。』

かう云ひながら、グルーシヤは相手の手を取り上げた。カテリーナはそのまゝに手をとられてゐた。で、グルーシヤはその手を唇の傍へもつて行つたが、急にそれを振り離して、

『ねお嬢さま、私はいつそあなたのお手を接吻せずにやめませうか。』

『どうなご御随意に。でもどうなすつたのです？』とカテリーナは急に身震した。

『ですからそれをよく覺えておいて下さいまし、あなたは私の手を接吻なすつたけれど、私はそれをしなかつたつてね。』

『無禮者！』とカテリーナは眞赤になつて、座から立ち上つた。

グルーシヤは悠々と立ち上つて、『今日のことをよくミーチャに話してやりませうね。あの方は必度笑ふでせうよ。』

『行つてしまへ、賣女め!』

『ね、私は賣女ですよ。が、あなたもくらがり一度男のところへ金子をかりにい
らつしたさうですね。』

カテリーナは聲を上げて、相手につかみかからうとした。が、アリヨシヤが中
へはいつて漸く事なきを得た。彼は押出すやうにして、グルーシヤにその場を去ら
した。後で色々カテリーナを慰めたが彼女は、

『あんまりだ! あんまりだ! あの人はあんな女にまで話したのでですよ。よくも
よくも——あなたの兄さんは人非人ですね。』とわめき乍ら正體もなく泣き沈んだ。

暫くしてアリヨシヤはその家を出た。後から一人の女中が追掛けて来て一封の
手紙を渡した。『ハフラーコヴのお嬢さんのリーザさんにことづかつたのです。』

アリヨシヤはその手紙をポケットへつつ込んだまま、僧院へ歸る道を辿つた。
夕暮で人の顔も定かには見ねなかつた。四辻へ出た時、

『金を渡すか、命を出すか。』と云ひながら、道の上へ一人の男が跳り出した。

『あゝ、兄さんか。』とアリヨシヤはびつくりして叫んだ。

『ハハハハハハ、俺はお前が来るのをさつきから待つてゐたんだよ、で、カテリー
ナに會つて来てくれたかい。』

『ね、あの女にも、グルーシヤにも。』ドミトリーはグルーシヤがカテリーナの家
ゐたと聞いてびつくりした。が、二人の女の争ひの始終を聞いて、『ねね、お前はあ
の女が何か考へがあつて、グルーシヤの手を最初に接吻したと思ふかい、いや、あ
れもグルーシヤに迷はされたのだよ、と云ふのはグルーシヤにちやない、彼女自身
の空想に迷はされたんだよ。それがあの女の夢だよ。』

『でも、兄さんがあのことまで、グルーシヤに話したのはいけないでせう?』

『なる程!』とドミトリーは、今はじめてそのことに気が付いたやうに聲を上げた。
『なる程あの女に話すには話した。が、それはあの時だよ、モークロエで騒いだ晩だ

よ、俺は酔ばらつて、ジブシーの女は唄つてゐた……俺は泣いてゐた。俺は泣きながらカーチャ（カテリーナ）の肖像の前に跪いて祈つてゐたよ。グルーシヤはその時の俺の眞剣な心持はよく分つてくれた筈だ。あの女も一緒になつて泣いておきながら、今日は——今日は「匕首を心臓へぶすり」か！それが女の十八番なんだよ！」で、ドミトリイはアリヨシヤに別れて、五六間行つたが、急に振り返つて、「おい、アリヨシヤ！俺はも一ツだけお前に白状することがあるよ。」と叫んだ。「ここを見てくれ。ここをよく見てくれ。ここにまだ一つ怖い罪惡がしまつてある。（彼はここにと云ひながら、本統に胸の咽喉のあたりに罪惡がしまつてあるやうな手つきで指さした。）この罪惡にくらべれば今迄での罪惡は何でもない。しかも俺はそれを止めようと思へば何時でも止めることが出来るんだ。そして、止めさへすれば明日にでも失墜した名譽を丁度半分だけ取り返すことが出来るのだ。だが、俺は何うしても止めない。此儘暗黒の中へ、瀾の底へ落ちて行くのだ。左様なら、俺の爲

めに祈つてくれるな。俺にはそんな値打がない。要らないよ。要らないよ。最う往け、左様なら。」
 彼は今度こそ到頭往つて仕舞つた。アリヨシヤも僧院へ歸つた。長老ゾシマの庵室へ近づくと、彼の胸は急に動悸した。
 「何故長老は私を世間へ出すと仰有るのだらう？ 此處には平和がある。彼處には暗黒と混亂ばかりだ。私は道に迷はずには居られない。」
 庵室へ入つたが、長老の病氣はいよ／＼重くなつたと聞いてアリヨシヤはびつくりした。どうも長老の御命はここ二三日しかもたないらしい。彼は明日も町へ出る人々に約束したが、その約束を破つても一日庵室にとち籠つてゐようと決心した。彼は床につく前にひざまづいて熱心な祈禱をこらした。が、その時ふとポケットの手紙に手がさはつた。取り出して読んで見ると、可愛らしい戀の手紙である。アリヨシヤはびつくりしながらそれを讀んだ。二度讀み直してみても、ふと我知ら

す笑ひ出した。笑ふのが罪だと思ひながら又微かにうれしさうに笑つた。

「神よ、すべての心おだやかならぬ人々を護らせ給へ。」と祈禱しながら寝についた。

四 破 裂

次の朝アリヨシヤは夜明け前に起きた。長老ゾシマは大分病氣がよくなかつたが、それでも床を離れて椅子に坐つた。顔は寝れてゐたが、尙ほ晴れやかに、殆んど嬉しさうに見わた。アリヨシヤを膝元へ呼んでちつと彼の顔をみつめてゐたが急に「あすこの人達はお前を待つて居りはせぬかい。」と訊いた。

アリヨシヤは口籠つた。

「あすこの人達はお前を待つて居はせぬか、お前は今日行くと約束したのぢやないかな。」

「はい約束しました。」

「それぢや行つてやるがよい。心配するな、わしは最後の言葉をお前に告げてからでなければ死にはせぬよ。俺はお前に最後の言葉を残して置く。それがお前への遺品だ。さあ安心して行つて来るがいい。」

アリヨシヤはつらかつたけれど、即座に長老の言葉に従つた。この世の遺品に最後の言葉を残しておくこと云はれたのが、心の底から嬉しかつた。

彼はまづ最初に父の家へ行つた。イワンはゐなかつた。フョードルはコーヒーを飲んでゐたが、アリヨシヤを見ると機嫌よく話し掛けた。イワンが彼にグルーシヤを手に入れさせないやうにして、ドミトリイと結婚させようとしてゐること、そしてイワン自身、カテリーナと結婚しようとしてゐること、昨日ドミトリイをつかまへて監獄へ入れてやらうかと思つたこと、然しさうなれば女はすぐに訪ねて行くだらう、その代り彼奴が餘命幾干もない親をなぐつたと聞いたら自分の方へやつて

来るだらう、さう考へついたのでそれは中止したことなどを話した。彼はブランドエーを出して飲みはじめた。

『うむ、俺はまったく人非人だよ、然しイワンと云ふ奴はわからないね。彼奴はこの家の誰とも似てゐないよ。全く、この家の人間ぢやないね。ミーチャは俺が甲虫のやうに踏み潰してやるさ。なに、お前はミーチャが好きだつたね。好きでもかまはないさ。然しイワンは誰も愛しないよ。昨日俺は、ミーチャに金の三千ルーブルもくれてやつたら、五年位この町を去つてくれはしないかと、お前に訊いて貰はうかと思つたんだがね。』

『は、訊いてみませう。』とアリヨシヤはつぶやいた。『あなたが本統に三千ルーブル出して下さるならば……』

『いやもう止せ止せ、俺はもうそんなことをするのは止めた。時にあのカテリーナと云ふ女は本統に彼奴と結婚する積りでゐるのかい？』

『ごんなことがあつてもあの女は、兄さんを捨てやうとはしないでせう。』

『どうして彼奴は女にもてるのかな。女の氣が知れないよ。が、俺だつて彼奴位の年であの時分だけの顔をしてゐたら、(俺ももとは彼奴よりは美しかつたからね)あんな奴に負けてはゐないさ。どうして彼奴にグルーシヤを渡してたまるものか。』彼は腹立しげにののしつた。『お前はもう歸つてもいい、今日はもう用事はないよ。』

アリヨシヤは父親の手に接吻して、静かにその場を立ち去らうとした。

『また明日来てくれよ。』とフヨードルは後から呼びかけた。アリヨシヤは父の家を出て、ハフラコーヴ夫人の家へ出掛けた。婦人は急に客間へ出迎へた。カテリーナとイワンとが来てゐると云ふことだつた。

『……今カテリーナと二人で何やら話してゐるのですがね、それや大へんですよ。いや、それよりも大變なのは、リーザがあなたの姿をみると、まるで氣狂のやうになりましてね。』

『それあみな嘘よ、お母様の云ふことなごみな嘘だわ。』とリーザは隣りの間から叫んだ。

『リーザはぼん／＼怒つて病氣になるやら應接間ではイワンさんとカテリーナとの間に争ひがはじまるやら、長老は病氣になられるやら、ほんごに私はどうしたらよからう。私は一分間ごとに眼をふさぐが、開いてみると別段何でもありませんわね。』

婦人は一人で忙しがつてきりきり舞ひをしてゐた。リーザも其處へ出て来てゐたが、一寸母親の次の間へ立つた隙を見て、アリョーシヤにささやいた。

『どうぞね私が昨日差し上げた手紙を返へして下さい。お母さんが来ないうちに早くして下さいよ。私は一晩中あんな冗談をしたのを後悔してゐました。』

『私は手紙を持つてはゐません。』

『それや嘘よ、あなたは必度さう云ふだらうと思つてゐたわ、必度ポケットに持つ

てゐるのだわ。』

『が、いよくアリョーシヤがそれを持つて来なかつたと聞いて、『あなたはあれを見て笑つたでせうね?』

『いや、そんなことはない、私も近々僧院を出るから勉強を了つた曉には本統にあなたの云ふ通りになるだらうと思ひます。長老は私に結婚せよと仰有いました。』

『でも、私は跛足なんだから。』

『だが、それまでには必度治りますよ。』

そんな會話があつた後に、アリョーシヤはカテリーナに會ひに行かうとした。その時夫人も出て来て、『それは應接間は喜劇ですよ、あの女はイワンさんを愛してゐるんです。それなのに一生懸命それを隠すやうにして、ドミトリーを愛してゐるやうな顔をしてゐるんですからね。』と告げた。

イワンは丁度別を告げて歸へらうとしてゐるところであつたが、アリョーシヤの

姿を見るとカテリーナが、『一寸待つて下さい。』とイワンを止めた。『貴方がたは私
が此世に持つてゐる友達の總てです。アリョーシヤは昨日のあの見苦しい事件の
目撃者です。イワンはそれを見ない、見たら何と仰有るだらう。けれども、私は今
日あの様な事件が起つたとしても、昨日のやうに振舞ふことしか出来ない。私はま
だあの人を愛してゐるか何うか知らない。縦しや愛して居るとしても今あの人を氣
の毒とは思はない、寧ろあの人を憎むのです。』

彼女の聲は震れた。涙は睫毛の中に光つた。

『私はやつと決心した。イワンは其の決心を讃めてくれました、ねねイワンさん、
左様でしたね。』

『左様です。』とイワンは低い聲で云つた。

『ですが、私はも一度アリョーシヤの意見がうかがひたい、私はね。』とカテリーナ
は自分の熱い手の中にアリョーシヤの冷たい手を取りながら、『私はあなたの一言が

私に平和を齎すだらうと云ふような氣がしてゐますよ。あなたの他に私の運命を決
してくれる者はない。』

『あなたは何を訊いてゐらつしやるのか、私には分りません。』とアリョーシヤは顔
を赤らめながら云つた。

『私は決心しました。たとへあの人があの畜生と一しよになつたとしても、私はご
んなことがあつてもあの人を捨てない。いづく、私はあの人たちの後をつけて、
あの人たちの邪魔をするやうなことはしない、私はひとり遠い町へ行く。けれ
ども、あの人が一旦不幸にあつた時、何時でもあの人は私を終生の友として、兄妹
として手頼ることが出来ませう。私は向ふで反古にしても一旦誓つた約束は破らな
い。私の一生はあの人の犠牲になるのです、これが私の決心ですよ。』

彼女は呼吸も途絶え勝ちに勝らだつた。恐らく彼女はもつと平氣で、威嚴を保つて、こ
の考へを述べたかつたに相違ない。しかし彼女の言葉はそれを裏切つた。あまりに

生硬だつた。

『でも、そりやあ一瞬間のことでせう。』とバフラーコフ夫人が口を入れた。

『さうです、この決心は昨日の侮辱に會つた影響には違ひない。そして瞬間的のものであらう。併しカテリーナさんの性格としてはその瞬間が一生の間續きませう。』と、イワンも傍から言つた。

『アリオトシヤさん、貴方のお考へを言つて下さい。』と言ひ乍ら、カテリーナはわつと泣き伏した。『いね、何でもないのですよ。貴方がたのやうなお友達が傍にゐて下さるから、私も心丈夫です。貴方がたは私を見捨てては下さらないでせうね。』

『處が、残念なことには、私は明日、モスコウへ参ります。恐らくは當分歸らないでせう。私も残念ですが止むを得ません。』とイワンが不意に言ひ出した。

『明日？ モスコウへ？』と言ひ乍ら、彼女の顔はひきつるやうに見えた。『まあ

好いこと。』と、不意に彼女の聲はまた變つた。『いね、あなたにお別れするのが嬉しいといふ譯ではありません。彼方にゐる姉や叔母に此方の事情を傳へて頂くことが出来るので嬉しいのです。』と言譯しながら、直ぐに立上つて手紙を書きにかかつた。『私には解らない、何うも信じられません。』と、アリオトシヤは心苦しうに言つた。『貴女は何うも舞臺で芝居をして……ある役に扮して被坐るやうでございませうね。』

『舞臺で？ 何を仰有るのです？』とカテリーナは眞赧になつて眉をひそめ乍ら言つた。『貴女の仰しやることは私には分りませぬ。』

『私も解りませぬ。』と、アリオトシヤは途切れの震む聲を續けた。『私には何と言つていいか分りませぬ。併し貴女は恐らくドミトリーを愛していらつしやるのではない、始めから一度も愛されたことではないのでせう。ドミトリーの方でもさうです。たゞ貴女を尊敬してゐます。ああ、私は何と言つていいか分りませぬ。併し

誰も本當のことを言はないから、誰か一人は本當の事を言はなければならぬと思つていふのです。』

『それが本當ですつて?』とカテリーナは叫んだ。

『貴女に言ひます。』とアリョーシヤは屋根の天邊から飛び下りるやうな聲で言つた。『ドミトリーを呼んでらつしやい。あの兄さんをここへ連れて来て、貴女の手を取り、又イヴン兄さんの手を取つて、二人の手を繋がせて下さい。』

『アリョーシヤ、お前は間違つてゐるよ。』とイヴンは平然たる態度で續けた。『この人は私を愛してゐるのではない。矢張ドミトリーを愛してゐるのだ。ドミトリーが侮辱すればする程、ああいふ人間であればある程愛するのだ。貴女は絶えず自分の烈婦らしい貞操を考へてあの男の不信を責めてゐなければならぬ。だが私もこんなことを言ふ必要はない。黙つて此處を去つて、永久に歸つて来ない方が私としてはいいのだ。が、私は何も彼も言つてしまつた。左様なら、カテリーナさん。』と、

強ひて作り笑ひをしながら部屋を出て行つた。

カテリーナは不意に次の間へ行つて、百ルーブル紙幣を二枚持つて出て来た。そしてそれをアリョーシヤに手渡して、一週間ばかり前にドミトリーの殴りつけたといふ退職大尉へこれを渡してくれるやうに——ドミトリーの許嫁の女だからといつて強いても渡してくれるやうにと託けた。そして、『左様なら。』と云ひ棄てて、彼女は次の間へ這入つてしまつた。アリョーシヤは兄たち二人の仲を直さうとしてあんなことを言ひ出しはしたものの、それが、カテリーナの心を傷けたやうな氣がして、一言詫びをしたいと思つたが、それをする暇もなかつた。

ハフラーコフ夫人に、『女の涙なぞ信用するものではありません。こんな場合に私は何時でも男の味方です。それよりも早くカテリーナさんの使命を果してお上げなさい。』となだめられて、アリョーシヤは氣を取り直して、夫人の許を辭すことにした。

五 恐ろしい合圖

アリヨシヤは大尉の許を訪れた後で、カテリーナにその結果を報告するため、再びハフラーコフ夫人の家へ引返した。カテリーナはヒステリー性発作の結果氣を失つたといふことだつた。——彼はハフラーコフ夫人と話してゐる間も一刻も早くドミトリーを捜し出さねばならぬと思つた。かうしてゐる間も何か一つの避け難い大破綻が起るやうな氣がして、氣が氣でなかつた。で、夫人が引止めるのを振切るやうにして、再びその家を出た。もう三時近かつた。『たとへ師の長老が私の居ない間になくなられたとしても私はドミトリーを捜し出さすには置くまい。このまゝ歸つたら私は一生、救へば救はれた不幸を打捨てて置いたといふ後悔を感せずにはゐられない。』

アリヨシヤは再び昨日ドミトリーに會つた庭園の四阿へ忍んで行かうとした。今日もドミトリーはグルーシヤを待ち伏せしてそこに隠れてゐるに違ひない。彼は垣根を匍ひ上つた。が、そこには誰もゐない。彼は腰を下して待つことにした。不意に樹の茂みから男女の聲を合せて歌ふ聲が聞けた。それが終ると、二人の囁き交す聲も聞けて來たが、それはスメルジャーコフと何處かの女とらしかつた。

『俺は子供の時からこんな風に育てられさへしなければ、もつと伶俐になつてゐた筈だ。俺を乞食の子だの父なし子だのといふ奴があつたら、誰でも決闘で殺してやる！ モスコウでも散々苛められたよ。グリゴリーの爺奴が喋舌つたからだ。わしは世の中が皆な嫌ひだ。ロシアを憎む！』

『でも貴方は外國人のやうだわね。まったく外國の紳士のやうに見わるのよ。』女は甘つたるい下司な聲で言つた。

その時不圖、アリヨシヤは噁をした。二人は黙つてしまつた。アリヨシヤは

立上つて二人の側へ出て行つた。女は隣家の娘だつた。

アリヨーシヤは出来るだけ平靜にスメルジャーコフに訊いた。

『ドミトリイはすぐに又ここへ来るかね?』

『私はドミトリイの事なんぞ存じませんよ、あの人の番人ではありませんものね。』

『私は只お前が知つてゐるかどうかを訊いたんだよ。』

『あの人のことなぞ何も知りません。又知らうとも思はない。』

『併し私は兄さんから聞いたが、お前はここの家の出這入りを見張つてゐて、グルーシヤが來たら早速告げに行く筈になつてゐると云ふぢやないか。』

スメルジャーコフは、由ありげにぢろりとアリヨーシヤを見返した。『それはね、あの人が私を殺すと言つて脅かすものですからね。』

『なに、殺すんだつて?』

『あの人のことだから何だつてやり兼ねませんや。若しグルーシヤが此處を通つて

一晩この家の中で過したら一番先きに酷い目に會ふのは私だと、あの人が云ふんですよ。』

スメルジャーコフはなほ續けて、自分は何にも知らないけれど、今日イワンがドミトリイを料理屋へ招待した、自分は今朝その使に行つたと話した。が、それも自分から聞いたとはくれぐれも言つて呉れるな、と念を押した。

アリヨーシヤはそれを聞くと、すぐに駈け出して行つた。兄のイワンは一人であつた。アリヨーシヤが料理屋の前まで行くと、丁度窓を開けてイワンが首を出した。そして彼を中へ誘つた。アリヨーシヤは僧形なので少しためらつたが、遂に思ひ切つてはいつて行つた。

アリヨーシヤは先刻の事件以來、イワンが以前よりもよく分るやうな氣がした。イワンにも、やはり自分たちと同じやうな心の若さがあつたのだと思つて、それを喜んでゐた。イワンの方でも心を開いて話した。

「私はあなたが、そんなに生活に對する思慕を持つてゐて下すつたのを喜びます。」とアリヨシヤは言つた。「人間は世界の何者よりも生活を愛しなければならぬ、私はさう思ひますよ。」

「生活の意識よりも生活を愛せよといふのか。」

「さうですとも。私は實に愉快だ。」とアリヨシヤは叫んだ。「長老は私に僧院から出よと仰しやつたのですよ。」

「さうだつてね。私も三十になつたら、生活の盃に背を向けやうと思つてゐる。」

お父さんは七十になつても盃を離さないつもりでゐるらしいんだね。あの人も寝かした巖の上に立つてゐる。肉慾といふ巖の上に立つてゐる。」

「時に兄さん、貴方は本當に明日お立ちになるのですか？」

「左様だ。」

「あとでドミトリーやお父さんがどうなるでせうね。」とアリヨシヤは心配さうに

訊ねた。

「お前は何時もそんな心配ばかりしてゐるんだね、私は知らないよ、私は何もドミトリーの番人ぢやないからね。」とイヴンは苛々しながら言ひ切つた。そして急に苦しいやうな微笑を泛べた。「これはカインが殺された兄弟について答へた返辭と同じだね。お前は今さう思つたのだらう。併し私は何時迄もここに番人となつてゐる譯には行かない。お前は私がドミトリーを妬んで此處を去るのだとお思ひかい。馬鹿な。私は私の用事が済んだから去るんだよ。」

「カテリーイナの處で用事が済んだのでせう？」

「さうさ、兎に角私は最早解放されたのだ。私は自由の身になつた。アリヨシヤ、私が今何んな軽い心持になつてゐるか、お前には解るかい。私は殆ど六ヶ月間も捕虜になつてゐた。それがこんなに容易く解放されやうとは昨日までも解らなかつたよ。」

『あなたは貴方の戀のことを言つてらつしやるのですか？』

『さあ、戀といふなら言つてもいい。私はあの若い婦人を戀した。私はあの女のために心を悩ました。あの女は私を悩ませた。が、それが急に過去の夢となつた。』

『恐らくそれは戀といふものぢやないでせうね。』

『アリヨシヤ。』とイヴンは笑つた。『お前は戀の事なぞ議論するなよ。お前には似合はないからね。あの女は私があの女を愛してゐるのを知つてゐた。あの女も亦私を愛してゐた。ドミトリイぢやない。あの女のドミトリイに對する感情は、只好んで自ら苦しむに過ぎないのだよ。併しあの女がドミトリイを思はないで私を愛してゐるのだと自分で承知する迄には二十年もかかるだらうよ。それがいいのさ。私はただ此土地を去るのだよ。』

アリヨシヤは、カテリーナがヒステリイの發作に陥ちて、氣を失つたと告げた。

『併しヒステリイで死んだ女はないからね、まあ私が行くには及ばないさ。』

『でも、貴方は今朝あの方がちつとも貴方を思つてゐないと仰しやつたでせう？』
『それは故意と言つたのさ、アリヨシヤ、一しよに三鞭を飲まうぢやないか、ちつと浮き立つたらどうだい？』

『兄さん、貴方は本當に明日の朝お立ちになるのですか？』

『朝？ 朝とは言やしないさ。何故又お前はそんなに私の立つことを氣に掛けるのだい？ まだ時間は澤山あるさ、永遠のやうにあるさ。』

永遠といふ言葉から、二人はまた永遠の問題について語り出した。他の國の人々は知らず、ロシアの青年は何を措いても先づ最初に永遠の問題を解決しようとするものなのだ。獨創的なロシアの青年の多數は永遠の問題より他には何物をも語らない。

イヴンは神について、また神の存在に對する疑惑について語つた。自分の思想を現はした長い詩の構想について語つた。彼の胸にも燃ゆる火はあつた。けれども彼

の頭の鋭さは、凡ゆるものの裏を、醜くさを見ないではゐなかつた。冷笑が、疑惑が、はてしない絶望が彼の胸には巢喰ふてゐた。

「俺は今も言つた通り、三十迄はごうしても生きるんだよ。三十になつたら盃を地面へ打ちつけるさ！」とイヴンは最後にかう言つて笑つた。

「何うして貴方に生きられるものか。」とアリョーシヤは悲しさうに叫んだ。「貴方のやうな頭で、貴方の様に胸のなかに地獄を持つてごうして生きられませう。貴方が此處を去るのはやがて貴方自ら殺すことです。貴方には逆も耐へられない。」

「私には有らゆるものに耐へる力があるよ。」とイヴンは冷たい笑ひを浮べながら言つた。

「何んな力ですか？」

「カラフゾフ一家の力さ。カラマゾフ一家の肉の力さ。」

「肉慾に墮ちて、それに依つて精神の息を塞めるといふのですか。」

「それにしても……だが、私も三十になるまでは滅多なことはしないよ。」

「併し貴方のやうなお考へぢや、如何ですかね。」

「カラマゾフ家の生き方で生きるのさ。」

「有らゆる事が正しいといふお考へですか？」

イヴンは顔を擧めて、急に眞蒼になつた。

「私はこの土地を去るにしても、お前だけは、お前の胸の中にだけは住めると思つたがそれも駄目かね。」と、イヴンは急に感情深く言つた。「併しあらゆる事が正しいといふ公式は私は捨てたくないね。それだからお前は私を捨てるかい？」

アリョーシヤは立上つて、優しくイヴンの唇に接吻した。

「さあ、もう遅くなつた。ドミトリーは來ないのだらう。アリョーシヤ、もう歸らうよ。」

二人は立上つて、料理屋の入口まで出た。

「ねに、アリョーシヤ。」とイヴンは決心した聲音で言った。「これから私が本當に立つ迄には未だ一度位は會ふだらうがね、こんな話は二度と言ひ出してくれるなよ。又ドミトリーについてもさうだ。駭かり頼んだぞ。だが、そのお禮には私も一つお前に約束する。三十になつて私が益を地に打うつけようとする時には、何處にゐても、たとひ亞米利加三界にゐても、もう一度お前と話をしに来るよ。これは眞面目に約束するんだせ。ぢやあもうお前は死にかかつてゐる長老の側へ行つてやるがいい。左様なら。」

イヴンは急に道を轉じて、後をも見ずに駈け出した。それが昨日ドミトリーがアリョーシヤと別れた別れ方と非常によく似てゐた。この似てゐるといふことが矢の様にアリョーシヤの胸を貫いた。彼はうら悲しい心持で、イヴンの後姿を見守つてゐた。が、彼も又急に踵を返して、僧院の方へ殆ど走る様にして行つた。——彼は後になつて、その一時間前にはあれ程ドミトリーを捜し出さねば置かぬと決心し

ながら、何うしてあつてしまつたのだらうと、幾度も不思議に思つた。

イヴンは父の家へ戻り乍ら、段々心が陰鬱になつた。陰鬱になるのは珍らしいことでもない。が、今はその原因がわからないので彼の心は一層不機嫌になつた。歸つて來ると玄關の前のベンチの上に、給仕のスメルジャーコフが夕涼みをしながら腰掛けてゐた。一目この男を見ると、今まで自分の心を苦しめたものは、スメルジャーコフだ、このいやな男だと云ふことがわかつた。「こんな哀れな、つまらない男がかうまで自分の心を悩ませるのか。」とイヴンは苛々し乍ら自分でも驚いた。

一體イヴンは近頃非常に人間嫌ひになつてゐた。が、どう云ふ譯かスメルジャーコフには一種の興味を持つた。彼を獨創的だとして考へた。そして思想問題などについて語り合つた。ところが近頃になつて彼はイヴンに段々いやな馴々しさを見せてくるやうになつた。と云つて別に、この男が身分をわすれて粗暴な言葉を使ふと云ふ譯ではない。寧ろその態度は懇懇に過ぎる位であつた。が、自分とイヴンとの間

には一種の默契がある、何か共謀した秘密がある、二人以外の者にはわからない秘密があるんですからね、と云ふやうな話振りをした。それが耐らなくいやなのだ。イヴンは苛々し乍らその傍を通り抜けようとした。スメルジャコフはベンチから立ち上つた。それだけでもイヴンには、特に彼が自分だけに何か話さうとしてゐるのだと云ふことがわかつた。イヴンは震へた。「失せやがれ、馬鹿。お前なぞに關係はないぞ。」と舌の先まで出かかつた。が、實際は我にもなく、「お父さんは寝てゐらつしやるか、起きてかい？」と云つてゐた。

「旦那様はまだおやすみですよ……私は吃驚しましたよ。」とスメルジャコフは落付いた口調で云つた。

「どうして吃驚したんだ。」とイヴンは一生懸命に憤怒を押へながら訊いた。給仕は返事をしなかつた。

「何故貴方はチエルマシニヤへ往らつしやらないのですか？」と彼は不意に眼を上

げた。そしてニヤ／＼と笑つた。「何故私が笑ふか貴方にはわかつてるでせう？」とその飛び出した左の眼が云つたやうにみわた。

「何故俺がチエルマシニヤへ行くんだい？」とイヴンはぎくりとして訊いた。スメルジャコフは又黙つてゐた。

「貴方のお父さんが、御自分であなたにお頼みになりはしませんか？」と彼は最後に云つた。

「馬鹿な！ 何でもいいから思つてゐることを真直に云へ！」とイヴンは不意に嘸鳴つた。

「何も思つてやしません。」と給仕は物臭ささうに答へたが、やがて又溜息をつきつき云ひ出した。「私は全く怖しい境遇にゐますよ、自分でもどうしていいかわからない。あの人達は全く氣違ひですね。私はあなたのお父さんと兄さんのドミトリイのことを云つてゐるんですがね。お父さんは私の顔さへ見ればあの女は來ぬか來ぬ

かと、女の来ないので私のせいのやうにお訊きなさる。又兄さんは兄さんで、よく張番をしてゐる、あの女が来たのを見逃すと承知しないぞと仰有る。それが兩方ながら日に日に劇しくなつて行く。私も最う本統にたまりませんよ。』

『何故お前はそんなことに關係したんだい。もとくドミトリイの爲めに張番などしてやるのが悪いさ。』とイワンは苛々し乍ら云つた。

『關係せずにおられますものか。あの女を見逃したら貴様を殺して了ふとおごかすんですもの、それに私は明日永い發作にかかりさうなんですよ。』

『永い發作とは何んだ？』

『暫らく續く發作ですよ、數時間も、若しくは一日か二日も。一度は三日續いたこともありました。』

『然し癲癇の發作は前以つてわからんと云ふぢやないか。どうして「明日」なぞ云へるんだい。』とイワンは好奇心をそそられ乍ら苛々して云つた。

『私は毎日屋根裏へ上る、明日は屋根裏から落ちるかも知れませんが、でなけりや窓の梯子から落ちるかも知れない。私は毎日窓へ降りて行きますからね。』

『馬鹿な、お前の云ふことはちつともわからないよ。』とイワンは詰じるやうに云つた。『お前は明日から三日の間、病氣のふりをして寝る積りだな？』

スメルジャコフはそれまで下を向いて、足の親指で地面をいぢくつてゐたが、急に足を縮めて、齒がみをし乍ら云つた。『たとへ私がさう云ふ手品をすることが出来るとしても、——そんなことは馴れた人には譯はありませんがね——私は自分を死から救ふ爲めに、さう云ふ手品を用ゐる権利がありますよ。病氣の間にあの女がお父さんのところへ會ひに来たとしても、私はあなたの兄さんからとがめられる譯はありませんからね。』

『馬鹿な。』とイワンは叫んだ。『それやおごかしたよ、誰が本統にお前を殺すものか。』

「は、あの人なら殺しますとも。それよりも私は兄さんがお父さんに對して氣違ひ染みたことをなすつた時、私が共犯者だと思はれるのを怖れてゐるんですよ。」

「どうして又お前が共犯者だと思はれるのだい？」

「それは私が大秘密の合圖をあの人に教へたからですよ。」

斯う言つてスメルジャコフの語るところによれば、父のフョードルは大層ドミトリーを恐れてゐる。で、折角女が來たとしても途中で邪魔をされては仕方がない。又、女のある處へ暴れ込まれても困る。そのために女の來た時には、戸を早目に五つ叩く。又、他に何か急用の起つた時は——例へば女の來てゐることをドミトリーが嗅ぎつけた時などは——ゆるくと二つ叩く。左様すればフョードルの方で、中から戸を開けるといふ事になつてゐるのださうだ。

「それをあの方に知られてゐるんですよ。」とスメルジャコフは話を結んだ。

「何うして兄がそれを知つてゐるんだ。お前が話したのかい？」

「私が恐ろしいから話したのでですよ。ドミトリーは始終お前は何か隠してゐる、言へ言へと迫るんですよ。私は何でもあの人の言ひ付けに従つてゐるといふ證據に、それを話したんですよ。」

「ぢや、お前がその場にゐて兄にそんな合圖を用ゐさせない様にすればよからう。」

「併し私は明日病氣になりますからね。」

「お前は俺を嘲弄つてるのか。何だかお前が仕組を立てて、皆お前の言ふ通りになるやうだよ。」

「何う致しまして。ドミトリー次第ですよ。ドミトリーの心一つですよ。」

「併しそんなことになりはせんさ。私の考へぢやあ、あの女は決して此處へ來やせんからね。女が來てゐないものを、ドミトリーが暴れ込むこともなからうよ。」

「いや、あの方は怒つただけでも、私の病氣のために起る猜疑の念からだけでも暴れ込みますよ。現に昨日だつてさうだつたぢやありませんか。それにあの方は、お

父さんが三千ルーブルを大きな封筒に入れて、その上に「戀しきグルーシヤに——若し我に來るならば」と書いて、紅いリボンで縛つて、部屋の中に持つてらつしやるのをよく御存知ですよ。お父さんは三日前にその封筒へもつて行つて、「わが雛鳥へ」と附け足されました。」

「何を言ふんだ。」とイヴンは我を忘れて叫んだ。「ドミトリーは金を盗むために親爺を殺しなごはしない。あの男はあゝいふ氣違ひだから、グルーシヤのためなら親爺を殺すかも知れない、併し泥棒はしないよ。」

「だつて、あの方は今非常に金に困つておいでですよ。」とスメルジャコフは妙に落着き拂つてはつきり言つた。「それにあの方はその三千ルーブルを當然自分に屬するものだと思つておいでですからね。又グルーシヤがあの方を唆かしてお父さんを殺させるかも知れませんかよ。といふのはグルーシヤだつて三千ルーブルのためにお父さんと結婚するやうなことはしないでせう。結婚する位なら財産を皆ふんだくつて

しまひまさらね。あの女もどうして伶俐ですからね。又、一文なしのドミトリーとは結婚しないでせう。ところで、もしフョードルが今亡くなれば、貴方がた御三人は少くとも四萬ルーブル宛位は分けることが出来る。グルーシヤと結婚してからぢや、何一つ残らぬ譯ですからね。」

一種の戦慄がイヴンの身體中を通つた。彼は急に顔を赧らめた。

「ぢや、お前は何うしてチエルマシニヤへ行けなごと俺に言ふのだ？」と、彼はスメルジャコフの言葉を遮つた。「私がここを立つたら、大變な事が起りさうだとお前は豫想してゐるのぢやないか？」

「その通りです。」と、スメルジャコフはイヴンの顔を見返し乍ら言つた。

「何がその通りだ？」と、イヴンは恐ろしい眼附をして訊いた。

「私は貴方がお氣の毒だから言つたのですよ。私なら何も彼も打捨つて行つてしまひますからね。」

「貴様はごうも大馬鹿者らしい。そして勿論……恐ろしい悪黨だ。」イヴンはかう言つたかと思ふと、急に立ち上つた。そして玄關へはいつて行かうとしたが、急に振り向いた。イヴンは何うかしたらスメルジャコフに飛びかかつて殴りつけてやらうかとも思つた。

「私は明日の朝早くモスコウへ行くよ。それだけだ。」と、イヴンは不意に我にもなく言ひ出した。後になつてからも彼はあの時どうしてあんな事を言つたものかと、長い間不思議に思つた。

「それがいいでせう。」と、給仕は恰もその返辭を待ち設けてゐたやうに言つた。「只此處で何事か起れば、モスコウからでも何うせ電報で呼返されますよ。」

イヴンは返辭をしないで、ぶり／＼しながらはいつて行つた。廣間で親爺のフョードルを見たが、「私は二階へ行くんですよ。貴方と話しに來たんぢやない、左様なら。」と言つたまゝ、振り向きもしないで上つて行つた。

フョードルは後からはいつて來たスメルジャコフを見て、「一體あいつ如何したんだ？」と訊いた。

「何か怒つてらつしやるやうですよ。」と給仕は傍見をしながら答へた。

その夜、イヴンは遅くまで寝つかれなかつた。何だか譯は分らないけれども、小舎へ行つてスメルジャコフの奴を殴りつけてやらなければすまぬやうな氣がした。あんな憎むべき奴はこの世に又と一人ないやうな氣もした。カテリーナの事は今迄忘れてゐた。が、あの女の前で威張つて言ひはしたものの、逆もその言葉通りに明日モスコウへ行くことなどは出來ないやうにも思はれた。

イヴンは急に寢臺から下りて、こつそり階下のフョードルの様子を見に行つた。彼はその後も幾度か階段のところへ出て、じつと階下の様子に耳を傾けた。後でそれを想ひ起すたびに、彼は苦いものを飲むやうな氣がした。

二時を打つた。彼は再び寢床にはいつた。今度はぐつすりと寢入つた。朝の七時

に眼を覺した。眼を覺ますと、直ぐに靴を取り寄せて出立の用意にかゝつた。シヤツも昨日洗濯屋から持つて來てゐた。何も彼も自分の出立を促すものらしい。階下へ降りて、彼はフヨードルに今からモスコウへ行くと告げた。親爺は少しも驚かなかつた。悔みもしなかつた。それ處か、序に頼むことがあると言つて大變喜んだ。そして商用でチエルマーシニヤへ行つてくれるやうに頼んだ。イヴンはそれを斷つたが、フヨードルは是非にも行つて貰ひたいと言つて無理矢理に押附けようとした。

『それぢや、貴方まで自分から私をあの忌々しいチエルマーシニヤへ追立てようとするんですね?』と、イヴンは憎々しげに薄笑ひを浮べながら言つた。

しかしフヨードルは行つて貰ひさへすればよかつた。朝飯にも馳走をした。馬車も立場から呼寄せた。家内中玄關まで送つて出た。

イヴンが馬車へ乗り込んだ時、スメルジャーコフも荷物を持つて這入つて來た。

『おい、俺はたうとうチエルマーシニヤへ行く事になつたよ。』と、イヴンは我知らず言つた。

『では、昔から伶俐な人とは一寸話しても甲斐があるといふが、本當ですね。』と、スメルジャーコフはイヴンを見返しながら、意味ありげに言つた。

馬車は駆け出した。イヴンは何が何だか分らなかつた。あたりの山や野や空の色を眺めたり、又は馭者に話しかけたりして、努めて氣を紛らさうとした。アリョーシヤやカテリーナの面影が心に浮んだ。何と思つてスメルジャーコフは、『伶俐な人とは一寸話しても甲斐がある。』なぞと言つたらう? それよりも彼は何と思つて、たうとうチエルマーシニヤへ行くなぞと彼奴に告げたらう? いくら考へても分らなかつた。

やがて、鐵道の出る驛までついた。彼はチエルマーシニヤ行と心を決めて驛舎へはいつて行つたが、一寸監督人の細君の顔を見ると引返して、玄關へ出て來た。

『もうチエルマシンニヤ行は止めた。おい、七時の汽車に間に合ふだらうかね？』
 『丁度間に合ひます。馬をつけませうかね？』

『ちやあすぐに出してくれ。それからお前方の一人が明日親爺の處へ行つて、私は眞直にモスコウへ行つたと告げてくれ。……いいか、……ちやこれがお茶代だ。多分親爺は寄越さないだらうからなあ。』イヴンはいくらか氣が軽くなつたやうに笑ひ出した。

『へね決して下さりやしませんよ。』と馭者も笑ひ出した。『何うも旦那、有難うございます、是非お寄り申します。』

『イヴンは、別の停車場からモスコウ行の七時の汽車へ乗り込んだ。『過去を葬れ、俺は古い世界と關係を絶つたのだ。新しい世界だ。新しい生活だ。』と言ひ續けにしてゐた。が彼は心の底はちつとも引立たなかつた。翌る朝、汽車がモスコウへ近づいた時、彼は突然我に返つて、『俺は卑劣漢だ！』と心に叫んだ。』

イヴンが立つたあとで、フヨードルは非常に愉快にしてゐた。が、二時間ばかりして思ひもかけない事が起つた。スメルチャーコフは客へ行つて、梯子の頂上から落ちた。幸ひにもグレゴリーの主婦のマルファがゐて、その物音を聞いて駆けつけた。彼は梯子から落ちたために癲癇を起したのか、癲癇を起したために梯子から落ちたのか、それは分らない、兎に角梯子の下に口から泡を噴き乍ら唸つて倒れてゐた。ヘルツエンシュトゥベといふ町の醫者が喚ばれたが、彼はこれは餘程重態だと言つた。實はこの醫者にも分らないのだ。

その晩、フヨードルはマルファの作つたまづい肉汁を飲んだ。も一つ困つたことには、マルファの亭主のグレゴリーまでが一昨日頃からぶらぶらしてゐたが、折も折たうとう腰が立てなくなつて、寝附いたといふのだ。フヨードルは出来るだけ早くお茶をすまして、ただ一人母家へ閉ち籠つた。彼は恐ろしい不安と甘い希望との入交つた氣忙しない期待の念に囚はれてゐた。といふのは、今朝スメルチャーコフ

から、「あの方は今日是非來るとお約束なさいました。」と、殆ど傳言といつてもいい程の情報を受取つてゐたのである。

中 卷

六 一本の蕙

アリヨシヤは胸を痛めながら長老の庵室へはいつて行つた時又びつくりした。恐らくは息も絶え絶えに臨終の床についてゐるだらうと思つた長老は、椅子にかけて四五人の侍者に取巻かれ乍ら、しめやかな、とはいへ樂しげな談話を取交してゐたのである。あたりはもう暗くなつて、室の中には燈火が點されてゐた。長老はアリヨシヤの顔を見ると、嬉しげに微笑して手を擡げながら、「よく來てくれた。私はお前がきつと來てくれるだらうと思つてゐたよ。」

アリヨシヤは側へ行つて、長老の前に跪きながら、さめくくと泣き出した。

「お前がわたしのために泣いてくれるのはまだ早いよ。」と長老は右の手を彼の頭に置きながら微笑んだ。「さあ立つて、お前の顔を見せておくれ。今日はあの兄さんに會つて来たのかい？」

「一人の兄さんに會つて来ました。」

「わしの言ふのは長上の兄さんだよ。わしがその前に跪いた人だ。」

「あの人には昨日會ひましたが、今日はまだ會ひません。」とアリヨシヤが答へた。

「ぢやあ明日は急いで行つて来るがいい、何事を差措いてもあの人に會ふんだよ。まだお前が行つて、或る恐ろしい出来事を喰止める時間があるだらう。私はあの人の前に貯へられてある大きな苦痛の前に跪いたのだよ。」

「長老さま。」とアリヨシヤは動悸つく胸を押へながら訊いた。「貴方のお言葉はあまり漠然として解りませぬ。兄の前にどんな苦痛が貯へられてゐるのでございま

す？」

「それは訊いてくれるな。わしは只昨日恐ろしいものを見るやうな気がしたんだよ。あの人の眼にあの人の全未來が表れてゐるやうな——わしはあのやうな眼附を一生の間に二度しか見たことがない。それだからわしはお前をあの人への許へ送つてやつたのだ。お前の優しい顔があの人への助けになるだらうと思つてな。が、何事も神様の御心のまゝにする外ない。……アレキセイヤ、私は今迄黙つてお前の顔を祝福してゐた。俺は今日迄何故この子の顔がわしに氣に入つてゐるか當人にも話さなかつた。今言ふがわしには一つの思ひ出があるんだよ。」と、長老は優しい微笑を湛ねながら一座を見廻した。さうしてそれから、長老の長い長い追憶談が始まつた。アリヨシヤが、長老ゾシマの亡き兄の面影に生き寫しといつていい位に肖てゐること、自分はこの兄を一生の案内者のやうに思つて慕つてゐたこと、その兄がなければ自分は發心して僧侶になることもなかつたらうこと、しかしその兄は十七でなくなつ

て、わしもそのうち家を放れて幼年學校に入り、やがて亂暴な軍隊生活を送つたこと、がある時ふとした出来事に出逢つて發心したこと、その由來などを長々と物語つた。そしてそれを語り終つたかと思つた時はめつきり弱りはててゐた。

長老ゾシマの死は思ひもかけず早かつた。五分間前には、誰もまだこんなことはないと思つて安心してゐた。が、彼は急に胸の痛みを感ずるらしく、顔色が蒼ざめた。そして、兩手を伸ばしながら、地面を接吻するやうに俯向いた。人々がかけ附けた時はもう冷たくなつてゐたのである。……

長老ゾシマの亡骸は、儀式によつて葬式の準備をされた。長老の死が傳はると、僧侶の別なく、夜明前から多勢の人が僧庵に集つて來た。中には待構はてゐたやうに病氣の子供を連れて來る者もある。つまり長老の死に際して奇蹟が行はれるだらうと豫期してゐるのだ。これを見ても、長老が生前からいかに一般に聖者として仰

がれてゐたかといふことが解る。

アリヨーシヤは片隅の方に壁に向つたまま、しく／＼と泣いてゐた。ある老僧がそれを見て慰めてくれた。

『もういいから泣くでない。泣くどころか喜んでもいい位だ。今日は如何いふ日だと思ふのか。長老は今何處にゐらつしやるかを考へてみるがいい。』

が、アリヨーシヤは背を向けたまま、返事もせず泣いてゐた。老僧もアリヨーシヤを可愛ゆいものに思ひながら、その儘立去つた。

ところが此處に思ひもかけない事變が起つた。といふのは、長老がなくなつたら何か不思議な尊い奇蹟が行はれるものと一般に信じられてゐた。が、夜が明けても一向そんな徴候が見えない。却つて、時の移るにつれて長老の死骸から惡臭が洩れ初めた。それが午後になつて、愈々堪へ難くなつた。長老の死體が腐る——何事ぞ！ 一般の僧侶にとつてそれは大きな驚異であらねばならなかつた。或者はそれ

見たことかと喜んだ。ある者はたゞ驚きの眼を睜つた。騒ぎはだん／＼大きくなつた。ゾシマには多くの渴仰者があつたと同時に、それを嫉視する多くの僧侶もあつたので、さうした者たちは時こそ來れとばかり盛んに惡聲を放つた。群集の喧轟は増々烈しくなつて、夜に入つても止む氣色はなかつた。

黄昏時アリヨシヤはこつそり僧院を脱出さうとした。前に自分を慰めてくれた老僧に見咎められたが、顔を背向けたまま走り出した。勿論彼は無智な群集のやうに即座に奇蹟を見やうなどとは思つてゐない。が、あれだけ徳の高い優れた人が、死後それに相應した光榮を擔はないで、却つて無智の群集から凌辱され踏み躪られるといふことは、彼にはどうしても信じられなかつた。何の爲か？ 誰がこんな裁きを下したのか？ 彼の無垢な經驗の淺い心には、どうしてもかういふ疑問が去らなかつた。彼の求めたものは奇蹟ではない。正義である。正義の力が見たかつたのである。

アリヨシヤはとぼ／＼と俯向き勝ちに門の方へ出て行つた。心のなかには、昨日兄のイワンと話し合つた問題が幾度もなく戻つて來た。勿論彼の信仰が搖いだのではない。只イワンとの會話によつて殘された印象が漠然と戻つて來たのである。『何處へ行くのだ。』と、神學生のラキーチンが不意に彼を呼止めた。『僕は二時間も前から君を探してゐたよ。』

アリヨシヤは、只顔を擧げた。その眼には苦惱の色が見えた。

『全く君の顔色は變つてゐるよ。例の有名な、人の心を和らげるやうな面影は更にないね。』

『どうぞ打捨つて置いてくれ給へ。』とアリヨシヤは顔を背向け乍ら言つた。

『君は何かい？ 長老の死骸が腐りかけたと言つて、そんなに鬱いでゐるのかい。』

まさか奇蹟があるなどと本當に考へてゐた譯ぢやあるまい。』

『僕は神に反く譯ぢやない、ただ神の手に造られたこの世界が堪えられないんだ

よ。』と、突然アリヨシヤは冷かに笑ひながら言つた。

ラキーチンは相手の顔を見い見い、空腹を感じたから臆腸でも食はうと言ひ出した。アリヨシヤは直に應じた。三鞭酒を飲みに行かうと誘つた。直に又それにも應じた。毎もの態度とは違ふので、ラキーチンも眼を睜つた。

町へ差しかかつた時、ラキーチンは急に思ひ付いたやうに、『ねね、アリヨシヤ君。』と低聲で言ひ出した。『それから何處へ行かうかね？』

『何處へでも、……君の好きな處へ行くとよ。』

『如何だ、グルーシヤの處へ行つてみようぢやないか、わゝ、君行くかい？』と、ラキーチンは懸念さうに聲を額はせ乍ら言つた。

『あゝグルーシヤの處か、行かうとも。』とアリヨシヤは穩かに答へた。

『何、行つてくれるか。』とラキーチンはびつくりしたやうに叫んだ。そして、途々も相手に遁げられでもするやうに心配しながら、手を掴んで引ばつて行つた。

グルーシヤはこの町の一番繁昌な通りに棲んでゐた。この女の生れはよく分らない。四年前にクヅマ・サムソフといふ金持の爺さんが何處からか連れて來た。その時分は瘦せた、臆病な、悲しげな、夢みるやうな十八歳の處女であつた。何でも十七の年にある士官に騙されて、間もなく捨てられた。士官は遠方へ行つて他の女を娶つた。グルーシヤ一人金もなく、人々の笑はれ者になつてゐたのを、例の金持の商人に救はれたといふのだ。生れはさのみ悪くはない。ある牧師の娘だといふことである。

四年前の蒼白い瘦せた娘は、今や丈夫な、大膽な、尊大な、そして薔薇のやうな女になつた。殊に事務の才があつて、大分金を貯めてゐるといふことだ。この二年間に大分この女を挑んだ男もあつたが、皆見事に跳ねつけられた。金を貯めるのは一種の投機で、殆ど見込のない古證文を安く買取つては、それを生かして十倍にもするのである。そんな關係からカラマゾフの親爺とも懇意になつた。フョードルは

最初利慾の念からこの女に近づいたが、後には情慾に變つて、何うしてもこの女を手に入れなければ置かぬと誓つた。そこへ又ドミトリイが競争者として現はれた。グルーシヤの保護者たる金持の商人は、二人の間で擇ぶならいつそ親父の方にしろ、息子の方ちや仕様がないよと好く注意した。町でもこの噂は有名になつたが、グルーシヤの心の底は何人にも分らなかつた。

アリヨシヤとラキーチンとが、この女の部屋へはいつて行つた時は、日もとつぷりと暮れてゐた。が、燈火はまだ點いてゐない。グルーシヤは長椅子の上に腕を枕にかつたまま仰向けに寝そべつてゐた。誰かを待つてゐるのか、着物も他所行のに着更へてゐる。何か苛々しながら蒼い顔をして、眼は血走り、絶えず足で長椅子を蹴つてゐた。足音を聞くと、むつくりと起上り乍ら、『誰?』と聞答めた。

「あの方ではありません、他のお客様ですよ。」と女中が言つた。

「如何したんです、アリヨシヤ君を連れて來たから、早く起きるがいい。それよ

りも燈火をつけて貰ひたいね。」とラキーチンは馴々しげに言つた。

「まああの方ですか。」とグルーシヤは鏡の前に立つて、解けた髪を手早く結へ直しながら、『併し飛んだ時に連れて來て下すつたわね。』と、不興げに呟いた。

「何だ、氣に入らないのか。」と、ラキーチンは腹を立てたやうに言つた。

「何ですよ、びつくりするぢやありませんか。」と、彼は窘めながら、今度はアリヨシヤに向つて、『御免なさい、あなたのことを怒つてゐるのぢやありませんからね。』

私は又ミーチャが飛び込んで來たのかと思つたのですよ。私は今ミーチャを騙して今夜クヅマの家へ金の勘定に行くからと言つて、あすこの家まであの人に送つて貰つたのですがね。あの人の姿が見えなくなると、直ぐにここへ飛んで歸つたんですよ。私はいい報告を待つてゐるんですがね。何うもミーチャが怖くて仕様がな。フエーニヤ(女中の名)や、よく窓の戸を閉めて置いておくれよ。』

「何うしてそんなにミーチャを怖がるんです。」とラキーチンが訊いた。「あんな男

位貴女の指二本でござうにでもなるぢやないか。」

『だから私はいい報告を待つてゐると言つたんぢやありませんか、それにはミーチャが邪魔なんですよ、あの人は今頃お父さんの家の裏で私を張番してゐるんでせうがね、此所へやつて來たら困るんですよ。』

『が、何うして着物を着更へてるのさ？』

『好く聞きたがるのね。私は使を待つてると言つたぢやないか。その使が來さへすりや、私はすぐに馬車に乗つて立つのですよ。そして、二度とは貴方がたのお眼にも懸りませぬよ。』

『一體何所へ行くのです？』

『そんなに聞きたがるご年寄になりますよ。』

彼女はラキーチンを棄てて、アリヨシヤに向つた。『私何うも今日は少し都合が悪いのだけれど、貴方の來て下さつたのはほんとに嬉しい。まあ此所に坐つて下さ

い、この長椅子に、ラキーチンが昨日か一昨日連れて來てくれたら——いや、今日がいいんですね、こんな時にお眼にかかる方が却つていいんですね。』

彼女は嬉しうにして、アリヨシヤと並んで坐つた。何うもそれが嘘らしくない。心から嬉しうなのだ。罪のない笑ひ聲なのだ。アリヨシヤは全く豫期が外れたやうな氣がした。以前からよくない女だと聞いてゐる處へ、昨日のカテリイナに對する仕打を見て、始めはもう耐らない氣がしてゐた。で、今こんな親切な罪のない顔を見るのは全く思ひがけない。彼は注意深く女を見やつた。凡てが單純で、人が善ささうで、他人を信じて疑はないやうな素振である。ただ少し昂奮してゐるらしい。

『どうしてそんなにぼんやりしてらつしやるの、アリヨシヤさん、私が怖いのですか。』と、女は戯談のやうに男の眼を見やつた。

『この人には悲しいわけがあるのさ。長老が匂ひ出したからね。』とラキーチンは口

を出した。

『あなたは黙つてらつしやいよ。何を言つてるのよ。又いやらしいことを言ひ出さうとしてゐるんだよ。……ね、アリヨージヤさん、あなたかうして私をお膝の上に坐らせてくれて。』不意に彼女はひらりと身を跳らして、まるで甘つたれた小猫のやうに、きやつ／＼笑ひながら、アリヨージヤの膝の上に飛び上つて、そしてしなやかに手を廻して彼の首を抱きしめるのであつた。『うちの信心深い坊つちやん、わたし一つあなたを浮立たせてあげるわ！ だけど冗談はぬきにして、あなた本當にあたしを膝の上に坐らしてくれて？ 怒らない？ あなたの云ひつけ次第でわたし直ぐ飛び下りるわ。』

アリヨージヤは黙つてゐた。が、この女に誘惑されるやうな心持は些とも起らなかつた。心の中の大きな悲しみがそれを防いでくれたのである。それよりも、今迄非常に怖れてゐた女が——そして、今自分の膝の上に坐つてゐる女が、一種の純粹

な、張りつめた興味しか彼に起させない。それが彼自身にも不思議に思はれた。

『よう／＼。たうとうこの坊つちやんを捕虜にしたね。』とラキーチンが叫んだ。『さあ、約束だから三鞭を抜くがいい。』

『ねね、抜くわ、抜きますとも。アリヨージヤさん、私、この人にあなたを連れて棄てくれたら三鞭を奢ると約束したんですよ。フエーニヤや。あのミーチャが置いて行つた瓶を持つて来ておくれ。あゝ、私も氣がくさくさするから飲みますよ。』

『一體どうしたんです？ 使といふのは何ですか？』と、ラキーチンが訊いた。『それとも秘密で言へませんか？』

『些とも秘密ぢやありませんよ。』とグルーシヤは相手を見返し乍ら言つた。『私の士官が来るのですよ、あの士官が来るのですよ。』

『あの男が来るといふ話は聞いたが、そんなに近くまで来てゐるんですか？』

『モークロエにゐるんです。そこから使を寄越すといふんですからね。かうしてゐ

るうちも私は気が氣ぢやないんですよ。』

『こいつをミーチャが聞いたら耐るまい。あの男は知ってるのか、知らないのですか。』

『知りませんとも。知つちやあ大變ぢやありませんか。なに、私はあの人に殺されることなんか怖かなくつてよ、だつて、あの人のことを思ふのは……今はそんなこと一切考へられないのよ。ところがアリヨシヤの事なら考へることが出来るわ。わたしアリヨシヤの目がちつと見てゐたいの。あのねアリヨシヤ昨日あなたはわたしをよほごひごい女だとお思ひなすつたでせう。私は全く山犬のやうな女ですのね。でもやつぱりあれがよかつたのよ。ああなたの方がよかつたのよ。』かう言つて彼女は物思はしげに薄笑ひを浮べたが、そのなかには何か残忍らしい影が閃いた。

『あの方は私を「鞭でひつばたいてやらなくぢやならない」といつていらつしやるさうですね。全く私はあの方に濟まないことをしました。でも、あの方は私を呼びに

来て、チョコレートで私を胡魔化さうとしたんですよ。矢張あれはあれでよかつたんだわ。でも私はただ貴方が怒つてらつしやるだらうと思つて、それが心配なんですのよ。昨日あすこから歸る途々も、貴方の眼に私がどんな厭な女に見えたらうとそればかり思ひつづけて來ましたわ。』

そこへ女中が盆に栓を抜いた瓶を載せて持つて來た。ラキーチンは一息に盃を飲み干したが、又自分で一杯注いだ。アリヨシヤも盃を口まで持つて行つたが、直ぐにまた下に置いて、『いや、やはり飲まない方がいい。』と、優しく笑つた。

『あなたが上らなけりや、私も止めませう。』と、グルーシヤが口を合せた。

『おや〜御馳走様。』とラキーチンは嘲けるやうに言つた。『而も御自分は膝の上にのつかつてさ！ まあこの男は不幸があるから飲まないとした所で、いつたい君に何かあるつてんだい！ ところで此男は自分の神様に叛逆を起して蠟腸を食べようとしてゐる所さ。』

『それは何のこど。』

『今日ゾシマ長老が死んだのさ。神聖なるゾシマ長老様がさ。』

『まあ長老様が！』とグルーシヤは叫んだ。『まあ如何しませう。私はそれさへ知らなかつた！』かう言つて、彼女は恭しく十字を切つた。『ああ私はどうしたといふんだらう、そんな時にこの方の膝の上に載つかつたりして！』女はびつくりした様に男の膝から飛び下りて、長椅子の上に坐り直した。

アリヨシヤは長い間ちつと女を見詰めてゐた。一種の光が彼の顔に輝いて来た。

『ラキーチン。』と彼は突然斷乎とした調子で聲高に言ひ出した。『からかふのは止してくれ給へ。僕が神様に叛逆を起したなんて……僕は君に悪感を持ちたくないから君も少しは人をよくしてくれ給へな。僕は君が今迄嘗て持つた事がない様な寶を失つたのだから、君は今僕の事と云々する資格がないんだよ。それよりかまあこの女を見給へ。このひとが僕を憐れんでくれたのが君にも分つたらう！ 僕は此處に來

る時意地の悪い女を發見する覺悟であつた——第一自分からしてさういふ所へ行きたくなつたのだ。何故つて僕が卑劣で、やくざだつたからさ。所が意外にも誠實な姉を發見した。愛する心を發見した。寶物を發見したのだ……この女は僕を憐んでくれた。グルーシヤさん、僕はあなたのことを言つてるんですよ。今あなたは僕の心を鼓舞してくれました。』

アリヨシヤの唇は震へて、聲が咽喉につまつた。

『この女がまるで君の命を助けでもしたやうだね。』ラキーチンは毒々しく笑ひ出した。『所がこの女は君を取つて食ふつもりであつたんだよ。君はそれを知つてるかい？』
『お黙りラキートカ。』とグルーシヤは飛び上つた。『二人とも黙つて頂戴。今こそ私は何もかも言つてしまふわ。アリヨシヤ、あんたにお黙りなさいといつたのは、あなたのやうに仰しやつて下さると私は耻しくてならなくなるからよ。私は全くよくない女なんですもの。成ほど私はあなたを墮落させたいといふ考へももつてゐま

した。が、今は違ひます。今そんなことをいふのは嘘です。』と、グルーシヤは極度に昂奮して、息を喘ませ乍ら言つた。

『二人ともまるで氣違ひだね。』ラキーチンはびつくりして顔を眺め乍ら言つた。『二人とも今に泣き出しさうだ。』

『わゝ、泣き出しますとも、私は泣きますよ。』と、グルーシヤは繰返した。『この人は私を姉と呼んで下さいました。私は決してそれを忘れません。ねにラキーチン、私も意地の悪い女だけごね、それでも葱をやつた事があるのよ。』

『葱つて何？ ちよつ馬鹿々々しい、本當に氣が違つたんだよ！』

二人は今や、一生の間にも滅多に會はれないやうな、精神上の最頂點を経験しつつあるのであつた。

『ねに、アリオーシヤ。』とグルーシヤは嘎れたやうな笑ひ方をしながら、彼の方へ向いた。

『今わたしが葱をやつた事があるつて言つたのはラキーチンに向つて自慢しただけで、あなたには決して自慢しないわ。あなたには別の目的があつて話すのよ。私は幼さい時乳母やからよくこんな話を聞かされました。昔、一人の百姓の女がありました。その女は大それない女だつたので、一生涯一つもいい事はしないで死んだから、地獄へ落ちて火の池へ投げ込まれました。ところがその守り神なる天使様は何とかしてその女を救つてやらうと、いろいろ探した末、神様に向つて、此女はある時畑の葱を一本抜いて乞食女にやつたと申上げました。すると神様はそれを聞いて、「ちやお前がその葱を持つて火の池の縁に立つて、その女に縋らせるがいい。首尾よく女を池から引上げることが出来たら、天国へ生れさせよう。葱が切れたらそれまでだ。」と仰しやつたのです。天使はさうしました。女は葱に縋つて上げられました。所がもう一息で上へ上げられやうとする時、他の亡者たちがやつて来て、その葱にぶら下りながら自分も一しよに引上げられようと思いました。その女は悪い女

でしたから「私の葱だ、お前のぢやないよ。」といきなり他の亡者たちを足で蹴りはじめた。が、斯う言ふや否や葱は切れて女は再び池へ落つこちてしまひました。女はさうして今も池のなかで苦しんでゐる、天使も泣く泣くその場を去つてしまひましたとさ。——これがその譬へ話なのよ。アリヨシヤさん、わたしもう誦記で覚えてゐるわ。だつて、わたしがその意地悪婆さんなんですもの。ラキーチンには葱をやつたと自慢したけれど、あなたには別な言ひ方をするわ。つまり一生涯の間にたつた一度ちよとした葱を恵んでやつたことがある切りの。やつとその位な善根がある切りの。ですからあなたね、アリヨシヤ、これからわたしを褒めないで頂戴。わたし意地の悪い悪い女なんですもの。耻しくなつてしまふわ。わゝ全くよ。本當に後悔してゐるのよ。實はねアリヨシヤ、わたしはあなたをこの家へ誘き寄せたくて堪らなかつたのでね、一生懸命ラキーチンに頼んで、若し此處へあなたを連れて來たら二十五ルーブルやらうつて約束したのよ。一寸ラキートカ、お待ち

よ！」かう言つて彼女は机の抽斗から二十五ルーブルの紙幣を取出した。

「何を馬鹿な、そんな馬鹿な！」とラキーチンはすつかり度膽を抜かれて叫んだ。

「さあ、これをお取んなさい、遠慮することはないぢやないの。あなたが自分で呉れと言つときながら……」と、彼女はその紙幣を男に投げつけた。ラキーチンは途方に暮れながらそれでもその金を懐中に入れた。

「アリヨシヤさん、私は何も彼も言つてしまひますよ。」とグルーシヤは部屋の真中に立ち乍ら續けて言つた。「私は全く貴方を墮落させようと思ひました。それは本當ですのよ。そのために私はラキーチンに賄賂を使つた位です。私はこれまであなたの顔を想ひ出す度に、『あの人は私を輕蔑してゐる、私を見向いてさへ呉れない。』といふやうな氣がしてゐた。段々それが烈しくなると、私は貴方を爪にかけて、一度は笑つてやらなけりや置かないといふやうになつた。私はこんな執念深い女ですのよ。それだのにあなたはこの私を姉だと言つて下すつたのねわ。……それで、今度

あの男が、——私を裏切つた男がやつて来ました。私は今かうしてその男の使を待つてゐるんです。その男のために、私はどんなに苦しんだでせう。五年前、クヅマが私をこの町へ連れて来た時は、私は部屋に閉ぢ籠つて泣いてばかりゐました。そして夜つびて眼を覺しながら、「今ごろあの人は何處にゐるだらう、他の女と一しよに私を笑つてゐるに違ひない。一度でもいいから會ひたい。會ひさへすれば恨は霽らしてやる。屹度恨を霽らしてやる。」とそればかり思ひ詰めてゐました。それからどうなつたと思つて！ わたしはお金を溜めにかかつたのです。人情といふものがなくなる、ぶくぶくと肥つて来る。それで少しは伶俐になつたと思つて？ ね？ 所がさうでないの。世界中で誰一人知る者もないけれど、時々夜の闇が落ちて来ると五年前の小娘の時と同じやうに寝ながら齒をぎりぎり喰ひしばつて夜つびて泣き明すことがあるわ。そして「今に見ろ、今に見てゐろ！」と考へるの、あなたすつかり訊いてくれて？ ぢや今私をどんな風に考へて？ 一月前に突然一本の手紙がや

つて来たんです。その男が来ると云ふんです。女房に死なれたので私に逢ひたいと云ふのですよ。私は息がつまるやうな氣がしました。その男が来て口笛でも吹いたら、私は打たれた犬のやうにしほくと、又その男の許へ這つて行くのぢやないかと思ふと自分ながら自分が信用できないの、私はわねながら淺間しいやうな氣がして、この一月と云ふものまるで目茶苦茶になつてゐた。ね、アリョーシャ、私はこんな女ですよ。でも、あなたにだけは私の眞實がみて貰ひたい！ 私がミーチャと遊んだのも、その男のところへ走つて行かない用心のためだったの。今あなたが入つていらつした前も、私はここで寝て待ちながら考へてゐました、私の一生を決めやうと考へてゐました。どんなに私の胸が煮わくり返つてゐましたか、ね、アリョーシャ、あなたからあの方にも云つて下さい、一昨日あんなことをしましたけれどどうぞ私のことをそんなに怒らないやうにして下さいね！ ああ今私の思ひがどんなだか、世界中に誰一人知るものはありやしない、又知れる筈がないんだもの

……私は今日は彼處へ短刀を持って行くかも知れないのよ。だけごとそれさへまだ決心がつかなくなつたんですもの……」

このしほらしい言葉を發すると同時に、グルーシヤは不意に意地も張りも無くなつて、しまひまで云ひ終らないうちに兩手で顔を掩ふて、長椅子の上なる枕に顔をうつめて、小さな子供のやうに、しやくり上げて泣き出した。アリョーシヤは席を立つて、ラキーチンに近づいた。

「ラキーチン、腹を立たないでくれ給へ、君はこの人に侮辱されたけれど腹を立てないでくれ給へ。君も今この人の話を聞いたらう？ この人は五年の間も苦しみ通したにもかかはらず、誰かが始めてやつて来て、まことの言葉を一言云ふが早いかもしれないか！ このことを許し、一切のことを忘れて泣いてゐるではないか！ この人を辱めもう一切のことを許し、一切のことを忘れて泣いてゐるではないか！ この人を辱めた男が歸つて来て呼んだだけで、この人は喜んでその男のところへ急いでゐるではないか！ 決して短刀など持つて行きやしない、持つて行くものか！ ところが

僕にそんなことが出来るだらうか、ラキーチン君はそんなことが出来るかどうか僕には分らないけれど、僕はどうしても出来ない。いや、僕は審判者として君にこんなことを云ひ出したのぢやない。僕自身が審判される者の中でも一番劣等な人間なんだよ、一體僕はこの人に對してどういふ人間に當るんだらう。僕が此處へ來たのは自分の身を破滅させて、「なに、構ふもんか！」と云ふ爲めだつたんだ。これと云ふのも僕の量見が狭いから起つたんだ。……僕は今日、たつた今この教訓を會得した。この人は愛の點に於ては僕等より上だよ……この人が今話したことを君は以前この人から聞いたことがあるかい？ ないだらう、聞かないだらう。若し聞いたことがあれば疾くに理解してゐる筈なものね……それから一昨日侮辱を受けたも一人の人、あの人にもグルーシヤを赦してもらひたいもんだね！ いや全く赦してくれるだらう。若し事情を知つたら……その事情も必ず知れるに相違ない……この人の靈魂はまだ本統の平和を得てゐないのだから、いたはつて上げなくちやならない。この

靈魂の中には確かに寶があるのだ……」

アリヨシヤは口を噤んだ、それは息が切れたからである。ラキーチンは毒々しい氣分に浸つてゐたにもかかわらず、呆氣にとられてじつと見つめてゐた。

「大變な辯護士が出来ちやつた！ 然し君はこの人に惚れたんぢやないかい、ね、グルーシヤさん、我が苦行者は本統に君に惚れ込んだんぢやつたよ。」

グルーシヤは枕から頭を擡げてアリヨシヤの方をみた。涙で急に腫ぼつたくなつた顔には感激の微笑が輝いた。

「アリヨシヤ、あの人なんか打つちやつてお置きなさい、本統になんと云ふ男だらうね、人もあらうに貴方に向つてあんことを云ふなんて。……」そして嬉しげな微笑を浮かべつつ彼女はアリヨシヤを小手招ぎした。「アリヨシヤこちらへ来て私の傍へお坐んなさい。私あなたに訊きたいことがあるの（彼女はアリヨシヤの手を取つて微笑み乍らその顔をのぞき込んだ。）——他ぢやないけれど、私はあの男を愛

してゐるか愛してゐないかどうでせう？ あの悪性男を愛してゐるかゐないかい？

私はね、あんた方の入つて来るまでこの暗闇の中に寝ころんだまま、あの男を愛してゐるかどうか自分の胸に訊いたの。アリヨシヤ、私の心を決めて頂戴、もうそういふ時が来たのだから、あんたの決めた通りにするわ。あの男を許したのかどうでせう。」

「あなたはもうその人を許してゐるんぢやありませんか。」とアリヨシヤは微笑し乍ら云つた

「ね、私は本統にその男を許してゐるんですね。」とグルーシヤは考へ深く云つた。

「何と云ふさもししい心でせう。」と机の上の杯を取つて一口に飲みほした。「私はおそらくその男を許してゐるんでせうよ。」彼女は聲に一種の威嚇をふくませながら云つた。が、又眼を床に落して、ちつと考へてゐる、「ね、アリヨシヤ、私は五年の間に自分の涙を愛するやうになつたのですよ……恐らく私はただ私の憤怒を愛してゐ

るので、その男を愛してゐるのぢやない……」
 『男こそつまらないね。』とラキーチンが口を出した。『ぢや、何だつてそんなに着物まで着かへたんです？』

『それやね。』と彼女は静かに云つた。『私はその男に會つたとき、「こんなになつてゐる私を見たことがありませんか。』と云つてやりたかつたのですよ。その男と別れた時分は、私も痩せこけた、よく泣く、肺病病みたいな娘でしたからね。私はその男の傍に坐つて、無中になる程そのかして置いて、「私が今どんなになつたか分つたでせう。だけごお相憎さま、甘い汁は髯を流るだけで口の中へは入りませんよ!」と云つてやるかも知れない。ね、ラキーチン、私の衣裳はかういふ目算があつてのことかも知れないのよ。』と、妙に皮肉な笑ひかたをしながら續けた。『私は綺麗なぞいらぬ、美しくもなりたくない、この顔に饅でも當てて、ナイフで切りさざんで、乞食にでもなつてしまひたいんですよ、私はその氣にさへなれあ、明日

にもクヅマから貰つた金も品物も返して、一生涯日儲取りでもして暮しますよ。ね、ラキーチン、お前さんはそれが出来ないと思ふのかい、私には出来るよ、出来るよ、出来るよ、出来るよ、出来るよ!』彼女はヒステリーのやうな叫び聲を上げた。そして、再び両手に顔をかくしたまゝ、枕の上に突つ伏した。

ラキーチンは立ち上つた。『だいぶおそくなつた、出掛けやうぢやないか、寺の門が閉まるよ。』

グルーシヤはいきなりおごり上つて、『アリョーシヤ、あなたもう行つてしまふ積りなの、一體あなたは私をどうしようど云ふの。私を、私をこんなに昂奮させて苦しめて置き乍ら、またこの一晚を一人で明かせと云ふの!』

『然しこの男が、君のところ泊まるわけにはいかないぢやないか。だがお望みなら御勝手に、僕は一人で歸るさ!』ラキーチンは毒々しく冷かした。

『お黙り意地悪! この人が今日私に云つてくれたやうなことを、お前さんが一度

だつて云つたことがあるかい。』

『この男が君にどんなことを云つたい!』

『この人が何を云つたか私にはわからない、ちつともわからない、まるつきりわからない。ただ自分の心にさう感じられたんだわ。……この人は私の心の底の底からひつくり返してしまつたのよ。私を憐れんでくれた始めての人なの、たつた一人しかない人なの! フリヨシヤ、天使、何故あんたはもつと前に来てくれなかつたの?』と、急に氣違ひにでもなつたやうに男の前にひざまづいた。『私は今迄であんたのやうな人を待ち受けてゐたのよ。誰か来て「許してやる」と云つてくれさうな氣がしてならなかつたわ。私のやうな汚れた女でも、いやらしい的なしに愛してくれる人は誰かあるに相違ないと信じてゐたわ!』

『一體僕は君に何をしたらと云ふんです。』とアリヨシヤはうつ向いて女の手を取りながら云つた。『私はただあなたに小さな葱を上げたばかりですよ。』

かう云ひ終ると彼は自分から泣き出した。その時不意に門前でけたたましい音がして誰かが玄關へ上つて来た。グルーシヤは飛び上つた。フヨニーヤは嬉しさのあまり息もたぐはだに駆け込んで来た。『お使が参りましたよ、モークロエから馬車が三頭立てで参りました。奥様この手紙を御覽なさいまし!』

グルーシヤはその手紙を引つたくるやうにして讀んだ。

『さあお聲は掛つた!』病的な微笑の爲めに頭を歪めながら、眞青な顔をして彼女は叫んだ。『口笛が鳴つた! さあ犬、四ツ這になつてお行き!』

彼女が決しかねたかのやうに立ちすくんでゐたのは、ただ一瞬間に過ぎなかつた。急に血がどつと彼女の頭へ流れ込んで、双頬を火のやうに赤くした。

『私に行く。』不意に彼女は叫んだ。『ああ、あの五年間の涙もこれでお別れだ! 左様ならアリヨシヤ、もう私の運命は決まつた、皆さんももう往つて下さい。グルーシヤは新生活へ入るのでですよ。ラキーチン、私のことを悪く思つて下さるな。私は

死しに行くいくんですよ、ああ！まるで酔よつぱらひのやうだわね！」

かう云いひ捨てて、彼女かのぢよは寢室しんしつへ飛び込こんだ。二人ふたりは止やむを得えず戸外こゝわいへ出でた。庭にほには一臺だいの馬車ばしやがゐた。馬うまを取りかへるとて、提灯ちやうちんが右往左往うわさわうしてゐる。二人ふたりが階段かいたんの下したへ降りた時とき不意ふいに寢室しんしつの窓まどを開あけて、グルーシヤが叫まんだ。

「アリヨシヤ、ミーチャミーチャによろしく云いつて頂戴ちやうだい、それからわたしの様な悪黨あくたう女をんなでも悪わるく云いはない様やうにつてね。未まだ其上そのうへに、「グルーシヤはあんたの様な正直しやうじきな人ひとの手てに入いらないで、卑怯ひげふ者の自由じゆうになりました！」つてね、此この通りまじな云いひ方かたで傳つたへて頂戴ちやうだい、それから未まだあるのよ……グルーシヤは一時間じかん、たつた一時間じかんあの人ひとを愛あいした事ことがあるの、だから此この一時間じかんを今後こんご一生しやう忘わすれないでゐる様やうに、とかう云いひ添そへて頂戴ちやうだい、グルーシヤが一生しやう涯がいと云いつて吩咐いひつけたつてね……」

彼女かのぢよは涙なみだに充みちた聲こゑで言葉ことばを結むすんだ。窓まどはぱたりと閉しつた。

「ふむ！」とラキーチンは笑わらひ乍ならつぶやいた。「とう／＼ミーチャに止とめをさし

ちやつた。おまけに一生しやう忘わすれないやうにしてくれだときさ！ ひどい女をんなだね！」

アリヨシヤは返辭へんじをしなかつた。ラキーチンは不意ふいに自分じぶんが負まけたやうな、痛いたい傷きずに觸さわられたやうな氣きがした。こんなことに成ならうとは彼かれも全然ぜんぜん豫期よきしなかつたのである。

「あの女をんなの士官しきわんと云いふのは波蘭人ポーランドじんだよ。」と、彼かれは再またび始はじめた。「今はもう士官しきわんでもない。何でも西伯利亞シベリヤの軍隊ぐんたいに居ゐたと云いふ話はなしだ。で、今度こんご職業しやくぎを失うしなつた處ところから、グルーシヤの金子かねを貯ためてゐると云いふ話はなしを聞きつけて遣やつて來きたのだよ。話はなしと云いふのはこれだけだ。」

アリヨシヤは又また聞いて居ゐなかつた。

「ぢや、愈々いよく僕ぼくを輕蔑けいべつしてゐるのだね、僕ぼくがああ二十五にじふごルーブルを取とつたから、友とも達たちを賣うつたとも思おもつてるのだらう。」

「あゝラキーキン君くん、僕ぼくはそんなことを忘わすれて仕舞しまつてゐたよ。」と、アリヨシヤ

は叫んだ。「君の方で僕に想ひ出させるのだ。」

これがラキーチンにとつて最後の藁であつた。「君等二人共勝手にしろ、もう今後は僕も君とは會はないよ。」かう云つて彼は暗がりの中にアリヨシヤを残しながら横町へまがつてしまつた。アリヨシヤは町を出て野を横切りながら僧院へ戻つた。

庵室へ辿りついた時はもうおそかつた。門番は潜りを開けて入れてくれた。アリヨシヤはおづ／＼戸を開けて棺の安置してある寢室へ入つて行つた。あたりに誰もゐない。只一人の老僧が棺の前に坐つて静かに福音書を読んでゐた。アリヨシヤはその後にひざまづいたまゝ、祈禱をはじめた。彼の心は色々に亂れた。一つの感情がたへす他の感情に變つて、ぐる／＼と廻轉した。どれだけ時間が経つたともわからない。一人の瘠せこけたお爺さんが彼の前へ現れた。何やら云つた聲が長老ゾシマのやうにも思はれた。が、その姿は消えて棺だけが白く残つた。老僧の福音書を讀む聲が又はつきりと聞えて來た。アリヨシヤは思はず飛び上つて戶外へ出た。

天の圓天井は星屑を鑲ばめながら、廣々とそこひも知れず立つてゐる。天の川は地平線から地平線へはの白く流れてゐる。爽やかなそよともうごかぬ静かな夜が地球を包んだ。地上の静寂が天上の静寂と溶け合ふやうに見えた。

アリヨシヤはぼんやり立つたまゝ眺めてゐた。が、不意に大地の上へ身を投げ出した。どう云ふ譯だか知らないが、彼は大地を抱いてそれに接吻せずにはゐられないやうな氣がした。彼は泣いた。涙に大地をうるほしながら、いつまでも、いつまでもこの世界を愛しようと契つた。

彼は何を泣いたのであらう？ 三日の後彼は世の中へ出ると云ひつけた長老の言葉に従つて僧院を出た。

七 億が來たんだ

ドミトリイイはグルーシヤが自分に最後の言葉を残して行つて了つたなぞとは夢にも知らなかつた。この二日間といふもの、彼は何とも云へない苛々した心の状態にあつた。アリヨシヤも彼に會ふことが出来なければ、料理に待つてゐたイワンも到頭會はず了ひになつた。

グルーシヤは一時間だけ心から彼を愛したとは言つたが、何時も残酷に、無慈悲に取扱つた。一番不可なのは、女の心が解らないことである。彼は女が内部の争闘に苦しんで不決断の状態にあるとは知つてゐた。が、何が女をその様に苦しめてゐるのか、それは彼には分らなかつた。彼にとつて何より苦しいのは自分と父親フヨードルとの争ひである。不思議なことに、例の士官が歸つて来る、それを又女がそんなに心を苛立てて待つてゐやうなごとは、一度も考へつかなかつた。嘗てグルーシヤはその士官から來た手紙を見せた事がある。が、彼は全然それに重きを置かなかつた。グルーシヤの顔に表はれた、このシベリヤの士官に對する輕蔑の色を見

てとつたからかも知れない。とに角後は如何なるにもせよ、フヨードルとの争ひが目睫に迫つた問題だと考へてゐた。

彼は又グルーシヤの決心が不意に、一瞬の衝動から來るに違ひないと信じてゐた。女は不意に彼に向つて『連れて行つて下さい、私は永久に貴方のものですよ。』と云ふかも知れない。さうすりや彼は立ちに世界の際までも女を連れてゆく。世界の際でなくともロシアの際位まで落ちのびて、そこで誰にも知られずに結婚する。それから、その日から二人の新しい生活が始まるのだ！『今までとは違つた改革した、貞潔の生活が初まるのだ。』と彼は一心に思ひつめてゐた。自分が好きで墜ちて來た泥沼のやうな生活に耐へられなくなつて、彼は始終生活の一新に憧れてゐた。處さへ變つたら……と彼は思つてゐたのである。

が、これは好い方の解決である。もし悪い方に事が解決されたら……さうしたらどうなるか、ドミトリイはそれは至きり考へてゐなかつた。否、寧ろ考へまいとし

てゐた。で、好い方に解決されたとして、何うして女を連れてゆく？ 何處でその金を造る？ 彼はグルーシヤが金を貯めてゐることは知つてゐた。が、こんな際女の金を使ふなぞいふことは、彼にはとても耐ゐられないことだつた。如何しても自分の金で連れて行かなくてはならない。が、その金はない。さう思ふ度に、彼はカテリーナの金を不正に使ひ込んだといふ良心の苛責を受けた。まづあの三千ルーブルをカテリーナに返さなければあの金にも手がつけられない。「返さないで手をつけたら、自分は並の盗坊だ、無頼漢だ、無頼漢になつて新しい生活は始められない……」とドミトリーは固く思ひつめてゐた。あの夜アリヨシヤと別れてからも彼は狂人のやうになつて、その金が調達出来ない位なら、いつそ泥棒でもしようかと思つた。「カテリーナの金を騙して奪つて、その金でグルーシヤと一緒に逃げたあの女に言はれる位なら、いつそ俺は泥棒をした方がいい。人殺しでもする。そしてシベリヤへ送られた方がいい。」と、彼は齒を鳴らしながら考へた。

が、彼は、これ迄金を使ふばかりで一文も儲けたことのない坊つちやん氣質からまだ三千ルーブルの金が天からでも降つて来るやうな氣がしてゐた。彼は不圖クツマサムツノフの許へ行つてみようと思つた。例のグルーシヤの保護者の爺さんである。彼はこの商人とは一度も近附きになつたことはなかつたが、事情を打明けてさへ頼んでみたら、何とかなるかも知れないと思つた。クヅマはきつと自分と女との過去の関係を後悔してゐるに相違ない、今はただ彼女の友達となり保護者となつてゐるばかりだから、女の將來が極まる基だと思つたら、そんな事位はしてくれさうなものだと思つたのである。

彼は町の四辻でアリヨシヤと別れてから、その夜は殆ど一睡もしなかつた。明る朝の十時頃にはクヅマの玄關に立つて案内を乞ふた。クヅマは濫々逢つてくれるにはくれたが、ドミトリーの言ふ事は取上げなかつた。自分の母親の遺産の内からフヨードルが横奪したチエルマシニヤの村は、當然自分の所領となるべきもので、

辯護士にも見て貰つたが、なほ訴訟を提起する餘地がある、その村は二萬五千ルーブルの値打があるから、今迄父から受取つた分一萬七千ルーブルを差引いてもなほ七八千ルーブルの請求は出来る筈である。その一切の證據書類を提供する事を條件として三千ルーブルの金子を立替へては貰へないだらうか、と彼は言つた。商人は冷淡にそれを聞いてゐたが、やがて『私はそんな仕事には關係しない。』ときつぱり言ひ切つた。ただ、ここにリヤガファイといふ百姓があつて、チエルマシニヤの林の値段についてフョードルと談判をしてゐる最中だといふ話だから、いつそその男に證文を賣つたらどうだらう、と言葉を添へた。

ドミトリイはクヅマからさう言はれると、すぐに彼の家を飛び出した。チエルマシニヤへ行かうといふのだが、さて、その馬車賃さへもない。彼は銀側の懐中時計を猶太人の時計屋に賣つてやつと六ルーブルを得た。それと下宿の婆さんから借りた三ルーブルと、合せて九ルーブル。彼はそれを持って馬車に飛び乗りながら、一

散にチエルマシニヤへ駈けさせた。何しろ自分の留守の間にグルーシヤが父親の許に行きはせぬかと氣が氣ではない。夕方までに歸つてくる筈だつたのが、道距が思つたより遠くて行き着いた時はもう夜になつてゐた。百姓家をたづねあてて訪ねてみるとリヤガファイは酒を飲んでぐつすり寝込んでゐた。家内の男は明日にしろどいつたがごとかく待つてみることにした。『あゝ實際の人生には怖ろしい悲劇があるものだな。』と彼は呻くやうに言つた。そして途方に暮れながらとうその一夜はその小舎のなかで明かしてしまつた。

明る朝、彼が眼を覺ました時は、もう日が高く登つてゐた。もう九時頃らしい。見ると、リヤガファイは起きてゐるにはゐたが、朝つばらから酒びたりになつてゐて正體もない有様である。彼は驚いた。呆氣にとられた。がどうにもならない。——彼はもう一度一散に町に歸つて来るより他はなかつた。

彼は町へ歸ると、すぐにその足でグルーシヤの所へかけつけた。それからの話は

既に讀者は知つてゐる。ドミトリイに飛び込まれて、グルーシヤは早くこの男の手から遁れるために、故とサムソフの家の門前まで送らせて、十二時に又迎ひに来てくれと言つた。ドミトリイも又大いにこの手配を喜んだ。サムソフの家にある間は、女がフヨードルの處へ行く氣遣ひはない。

グルーシヤに別れると彼は直に下宿へ飛んで歸つた。が、女の顔が見えなくなる、彼は又嫉妬の念に捕へられた。こに角スメルチャーコフに逢つて、昨日から今日にかけて女がフヨードルの側へ行きはしなかつたか、まづそれを聞き糺さなければならぬと思つた。何をいふにも一文なしでは仕様がなない。九ルーブルの金は既に使ひ捨てた。彼はなほ今迄大切にして手離されなかつた決闘用のピストルを一對持つて出た。そして知合のある役人を訪ねて、それを質に十ルーブルを借り受けた。

ドミトリイはひた急ぎに急いで、裏道からフヨードルの家に近附いた。ところがここで又彼は驚かさなければならなかつた。スメルチャーコフは發作を起した

し、イヴンまで今朝モスコウへ向けて出發したといふのだ。これには彼も弱つた。スメルチャーコフが病氣では誰も張番をしてくれる者はない。仕方がないから、一時間のうちに用事を済まして、それからもう一度グルーシヤの居場所を突止めて、又この家へ取つて返して十一時まで張番をする、十二時にはサムソフの家へ女を迎へに行く、といふことに手順を定めた。

彼は下宿へ飛んで歸つて、頭を梳つて着物を着更へて、ハフラーコフ夫人の家を訪ねた。彼はこの夫人から金子を借りようと決心したのである。元來夫人は彼を嫌つてゐるといふことを彼は知つてゐた。が、同時にカテリーナとイヴンとを一しよにしたがつてゐることをも知つてゐたので、或は、自分をカテリーナから遠ざける手段として三千ルーブルの金を借さぬでもなからうと思ひついたのだ。

ハフラーコフ夫人はすぐに逢つてはくれた。が、夫人のいふことは何のとりどめなく、結局ドミトリイは拒絶されてしまつた。ドミトリイはいら／＼しながら夫人

の長話を聞いてゐたが、愈々駄目と分ると、彼は、吠ねるやうに一言呻いた。

『あゝ、何の事だ!』

そして、彼は力任せに一つ卓子をどやし、カツとそこへ唾を吐きすてたまま狂人のやうに通りに飛び出して行つた。彼は、暗の中を憑物でもしたやうに歩き廻つた。不意に何やら躓いたと思ふと、途端にきやツといふ女の聲がした。

『あゝ、この人は私を殺してしまふよ。』

『あゝお前ぢやつたか。』とミーチャは叫んだ。一昨日サムソフの家で見かけた年寄の女中だつたのだ。『お前はクヅマの女中だね。お前に訊くが、グルーシヤはまだあすこにゐるか。』と、氣遣はしげに訊いた。『私は今し方お前の家へあの女を送つて行つたよ。』

『わゝ、あの方は一度いらつしやいましたが、間もなくお歸りでした。』

『なに、歸つた? 何時?』

『いらつしやると直ぐでしたよ。』

彼は物をも言はずグルーシヤの家へ駆け出した。瞬く間にその家へついたが、恰度グルーシヤが立出してから十五分ばかりも経つてからである。女中のフヨーニヤはランプの下で針仕事をしてゐたが、ドミトリーが飛び込んで来たのを見ると、『ああ、大尉が!』と、鋭い聲を擧げた。

『聲を立てたな! 女は何處へ行つた?』

が、さう呷鳴つたかと思ふと、又女中の前に跪いて、『どうぞお願ひだから聞かしてくれ。何處へ行つたか聞かしてくれ。』

『私は存じません、たとひ殺されても存じません。』とフヨーニヤは断言した。『ちつと今しがた、貴方と一緒に出掛けたんぢやありませんか。』

『女は歸つたよ。』

『いゝね、お歸りになりません、何んな事があつても。』

「嘘つ吐くな！ お前の顔を見りや、もう解つたよ。」と言ひ乍ら、ミーチャはその儘飛び出して行つた。女中は案外早く難を遁れたので喜んだ。がミーチャは片手を戸にかけたまま、ふとそこにある立能に眼がつくと、いきなりそれを掴んで出て行つた。

「あゝ、如何しよう、あの人は誰か殺しに行つたんだよ。」と、フヨニーヤは手を擧げ乍ら叫んだ。

何處へ彼は行くのだ？ 女はサムソノフの家から真直に父の許へ走つたに違ひない。今は隣家の主婦さんにもスメルデヤーコフにも訊くに及ばない。二人とも買収されてゐるのだ！

彼はフヨードルの家の裏から廻つて、隣の垣根と父親の家の石垣との間の小徑へ忍び込んだ。そして、石垣の頂上に飛びついて這ひよりながら、それを跨いだ。すぐ下が裏庭になつて、父親の寢室に燈火のついてゐるのが見えた。

「彼處に女が來てゐるのだな！」

彼は石垣から庭へ飛び下りた。あたりは死んだやうに闇寂してゐる。故とさうしてゐられるかと思ふほど静かである。彼は自分の足音に胸を冷しながら、一歩づつ窓の下へ近づいた。左手の家の内部から庭へ通ずる戸はびたりと閉つてゐる。彼はあたりに氣を配りながら、窓の下に叢に身をひそめた。

二分間ばかり彼は息を殺してゐた。が、又そろ／＼と頭を擡げて窓のなかを覗いてみた。室の中はごに紅い緞子の帷が垂れてゐる。「あの背後にグリーンシャがあるのだな。」とミーチャは考へた。フヨードルは朱總のついた絹寢衣を着て、何やら考へてゐるやうに窓の側に立つてゐた。不意に物音を聞きつけたやうに耳を澄ました。が、何も聞けなかつたと見えて、机の側へ行つてウオツカをコップへついで飲み干した。

「どうも一人らしい。女が來てゐれば顔の様子がもつと違ふ筈だ。」とミーチャは考へ

逃げ出したが、此方は何處迄も逃つて行く。やつと石垣に手をかけて這ひ上らうとしてゐる處へ逐ひついた。兩手に足を抱へたまゝ離さない。

『親殺しッ!』と一聲、あたりを響き渡るやうな聲で叫んだ。彼は相手の誰であるかを認めたのである。が二度目に聲を出さうとした時、電光に打たれたやうに倒れてしまつた。ミーチャは庭へ飛び下りて倒れた人間を抱き起さうとした。そして、手に持つてゐた左能をほうり出した。彼は老人の頭蓋骨を打破つたか、それともただ眼を廻しただけか確かめなかつたのだ。血はごくごく流れてゐた。ハフラコーヴ夫人を訪問の際持つて出た新しいハンケチを取り出して、老人の顔を拭つてやつたが、ハンケチはすぐに血でぐつしよりになつた。

『俺は何を仕出かしたらう。』と、ミーチャは思はず身體を引緊めた。『もう仕方がない。如何なるものか。』

彼は老人を捨てて置いて、石垣を飛び越した。そして片手に血だらけのハンケチ

を掴んだまゝ、それをポケットへ振り込み、町の中を一散に駆けて行つた。彼は再びグルーシヤの宿へ飛び歸つた。

女中のフヨニーヤは婆やといつしよにランプの下で針仕事をしてゐた。そこへ飛込んで行つてフヨニーヤを引倒しざま喉をしめつけて、

『さあ言へ、女は何處にゐる? 言はないと殺して了ふぞ!』と嗚鳴つた。

『言ひます、言ひます、もう何も隠しやしません。』とフヨニーヤは喘ぐやうに言つた。『モークロエへいらつしやいました。あの士官さんの處へ!』

『何んな士官だ?』

『あの士官さんですよ、五年前にあの方を捨てたといふ人ですよ。』とフヨニーヤはやつと物をいふ事が出来た。

ミーチャは喉をしめてゐた手を引込めた。そして何にも言ふことが出来ずに眞蒼になつて、たゞ相手の顔を見つめてゐた。が、何も彼も分つたらしい。一言で自分

へた。

何だか女の來てゐないのが不足なやうな、一種の奇立たしい心持がした。來てゐやう、來てゐないやら解らないのが忌々しいのである。彼はそつと窓の側へ寄つて豫ねてスメルチャーコフから聞いてゐる合圖をしてみた。ゆるくと二つ打つて、後は急に三つ打つ。「私は此處にゐる」といふ合圖である。

老爺は飛び上つた。いきなり窓を開けて、頭を突き出しながら、「グルーシヤか、お前か。」と顔に響く聲音で囁いた。

「やはり一人だ。」と、ミーチャは極めた。

「何處にゐるな、戸口の處か。あゝ、今開けてあげるよ。」

老人は半分身體を乗出すやうにして、暗がりを透して女の姿を認めようとした。

ミーチャは又息を殺し乍ら、じつとそれを見詰めてゐた。この老人に對する個人的嫌惡の情が堪へられない程烈しく募つた。彼は思はずポケットの玄能に手をかけ

た……

が、神様が見張つてゐて下さいました、とミーチャは後になつて申立てた。恰度その時グレゴリイが寢床から起き出して來たのだ。グレゴリイはふと眼を覺ました。背骨と左の足が痛んでかなはないけれど、こんな物騒な時に邸を見廻る者もなしに寢てゐるのが氣にかゝつた。彼はそろりと階段を降りて、戸外を見廻してみた。最初はそれだけに置いて置くつもりであつたが、ふと庭の小門を閉め忘れたことを思ひ出して、又よちよちと庭へ下りて來た。

小門はやはり開放してあつた。それを閉めて歸らうとすると、主人の居間の窓が開いてゐる。その窓はがらんとして誰もその中から覗いてはゐなかつた。彼は變に思つた、と、この時何やら異形な影が彼の十五六間前をすたすたと早足に動いてゆく。

「これだ！」とグレゴリイは思はず足の痛みを忘れて駆け出した。先方でも驚いて

逃げ出したが、此方は何處迄も逃つて行く。やつと石垣に手をかけて這ひ上らうとしてゐる處へ逐ひついた。兩手に足を抱へたまゝ離さない。

『親殺しッ！』と一聲、あたりを響き渡るやうな聲で叫んだ。彼は相手の誰であるかを認めたのである。二度目に聲を出さうとした時、電光に打たれたやうに倒れてしまつた。ミーチャは庭へ飛び下りて倒れた人間を抱き起さうとした。そして、手に持つてゐた本能をほうり出した。彼は老人の頭蓋骨を打破つたか、それともただ眼を廻したただけか確かめなかつたのだ。血はごくごく流れてゐた。ハフラーコウ夫人を訪問の際持つて出た新しいハンケチを取り出して、老人の顔を拭つてやつたが、ハンケチはすぐに血でぐつしよりになつた。

『俺は何を仕出かしたらう。』と、ミーチャは思はず身體を引緊めた。『もう仕方がない。如何なるものか。』

彼は老人を捨てて置いて、石垣を飛び越した。そして片手に血だらけのハンケチ

を掴んだまゝ、それをポケットへ振ち込み、町の中を一散に駈けて行つた。彼は再びグルーシヤの宿へ飛び歸つた。

女中のフヨニーヤは婆やといつしよにランプの下で針仕事をしてゐた。そこへ飛込んで行つてフヨニーヤを引倒しざま喉をしめつけて、

『さあ言へ、女は何處にゐる？ 言はないと殺して了ふぞ！』と嗚鳴つた。

『言ひます、言ひます、もう何も隠しやしません。』とフヨニーヤは喘ぐやうに言つた。『モークロエへいらつしやいました。あの士官さんの處へ！』

『何んな士官だ？』

『あの士官さんですよ、五年前にあの方を捨てたといふ人ですよ。』とフヨニーヤはやつと物をいふ事が出来た。

ミーチャは喉をしめてゐた手を引込めた。そして何にも言ふことが出来ずに眞蒼になつて、たゞ相手の顔を見つめてゐた。が、何も彼も分つたらしい。一言で自分

の境遇も呑みこめたらしい。

彼は一瞬間立つてゐたが、又機械的にフゾーニヤの側の椅子に腰を下した。何も考へてゐるのではない。ただ全身が麻痺したやうな気がするのだ。が萬事は日のやうに明白である。

不意に彼は子供のやうに優しく、殆ど今相手の喉をしめやうとしたことも忘れたやうに、フゾーニヤに向つて訊き出した。彼はグルーシヤのことを事細かに訊ねた。女中も相手の血に汚れた手に眼を睨り乍ら、すらくと口早に何もかも言つてしまはうとするやうにあらゆる質問に答へた。最後にグルーシヤが窓を開けて、『一時間だけは心からあの人を愛した、それを忘れないやうにしてくれ。』と、アリヨシヤに言傳てしたことまで告げた。それを聞いて、ミーチャは蒼ざめた顔をさつと赧くしながら微笑した。

「貴方の手をごらんなさい、血で一杯ですよ。」とフゾーニヤは注意した。

「あゝ。」とミーチャは機械的に返事をして、その手を見やつたが、すぐに又相手の質問を忘れて了ふらしい。が、又想ひ出したやうに、『この血はねわ、フゾーニヤ、人間の血だよ。如何してこの血が注がれた？ここに石垣がある。が、明日夜が明ければ、何もかも分るよ、……心配するな、私はあの女の邪魔はしはしないよ。私は傍へ退いてやる。私も傍へ退くことは知つてゐるからね。』

かう言つて、ドミトリイは不意にその室から馳け出した。十分後には、あの拳銃を預けた若い役人の許へ駆けつけた。ベルホーチンは彼の顔が血に汚れてゐるのを見て、思はず驚きの聲を上げた。

「どうしたんです、貴方は？」

「私はピストルを取戻しに來ました。」とミーチャは言つた。「金を持って來ましたよ。何うも有難う。急いでますから早くして下さい。』

ベルホーチンは愈々驚いた。彼はミーチャの手に大きな札の束があるのに眼を着

けた。虹の色をした百ルーブルの紙幣を血で汚れた手に掴んでゐる。

『が、一體どうしたんです？』と役人は客を見詰め乍ら叫んだ。『何處かで轉んだのですか、まあ自分でみて御覽なさい。』

彼は相手の腕を掴んで鏡の前へ連れて行つた。血に汚れた顔を見ると、ドミトリイは思はず飛び上つた。

『何だ！ もうお了ひだ。』と苛々しながら、急いで紙幣の束を左の手に持ち更へて、ポケットからハンケチを取り出さうとした。それも血でぐつしよりになつてゐた。

『これはどうだ？』と彼はそれを床へ捨てて、『襪つ切れでもあつたらどうぞ借して下さい。』

『只汚れたのですか、負傷ちやありませんか。』とベルホーチンは言つた。『ぢや、洗つたらいいでせう。』

『わゝ洗ひませう。だがこの紙幣を何處に置ませうか。』

『ポケットへお入れなさい。この机の上へ置いてもいいんですよ、失くなりやしませんからね。』

『あゝ、ポケットに？ だがそれはどうでもいいんですよ。』と彼は不意に氣がついたやうに言つた。『それよりもまづピストルを返して下さい。拜借した金はお返しします。』と一番上の紙幣を一枚取つて差出した。

『そりやあくづせませせんね、もつと小さいのがありませんか。』

『いゝわ。』と手に持つた紙幣をはぐりながら、

『いゝわ持つてゐません。』

『何時まあそんなに金持になつたのです？』とベルホーチンは訊いた。『お待ちなさい、隣の雜貨屋へ給仕をくづしにやりますから。』

『雜貨屋、上等！』とドミトリイははいつて來た給仕の方へ向いた。『隣家へ行つたら、ドミトリイ・フヨードロギツチがさう言つたと言つてね、三鞭酒を三打モークロ

エへ持つて行くやうに言ひつけてくれ給へ。それからチーズも、パイも、ハムも、何も彼も積むやうにね。」

「まあ待ち給へ、まづ金だけくづさせて、後で自分で行つたらいいでせう。早く行つて来い。」

ベルホーチンはそれからミーチャに顔を洗はせようとして上衣を手傳つて脱がせたが、それにもべつたり血糊がついてゐた。「何うしたんだ、誰かと喧嘩でもしたんですね。」

ドミトリイはやつと顔を洗つた。

「如何したんです、譯をお話しなさい。」とベルホーチンは答めるやうに訊いた。「誰を殴つたんです。……殺したんですか？」

「馬鹿な！」とミーチャは言つた。

「何が馬鹿です？」

「心配し給ふな。」とミーチャは急に笑ひ出した。「なに、ただ一寸そこで婆さんに躓いただけですよ、爺さんが何だから……」

「爺さんの婆さんなのつて……誰か殺したんですね。」

「なに、何でもないのでですよ、あいつは僕を勘辨してくれました……今頃はもう勘辨してくれた筈ですよ、……が、起上つたら勘辨はしてくれないでせうがね。」

「とに角貴方はよく喧嘩しますね、あの大尉を殴つた時もさうでしたらう。殴つてから酒を飲む、貴方の癖ですよ。」

「宜しい。さあどうぞピストルを返して下さい。貴方ともつと話をしたいが今はその暇がない。」

「一體何處へ行くんです？」と役人は再び訊いた。

「モークロエまで。」

「モークロエまで？　こんな夜？」

「嘗ては凡てを持つた、今は何にもない。」とミーチャは不意に言つた。

「そんなに持つてるぢやありませんか。」

「僕は金のことを言つてるんぢやない。金などは何うでもいい。僕は女のことを言つてるんですよ。……女心と秋の空、頼みがたない女の心か。どうです、僕は酔つぱらつてるやうに見えますかね。」

「酔つちやゐない。が、それよりも悪いやうだ。」

「僕は精神的に酔つぱらつてるんですよ。」

「なに、君はピストルの弾丸をこめるのですか？」

「は、込めるのです。」

ミーチャはピストルの箱を開いて、弾丸を取り出し乍ら、二本の指に摘んで、燈火の前に透してみた。

「何うしてそんなに弾丸を見てゐるのです。」

「何うしてと言つて？ 貴方は自分の頭へ弾丸を打込まうと思つたら、それを眺めて見やしませんか？」

「何ですつて？」

「この弾丸は私の頭の中へはいるのです。で、面白いから、ごんなだか見てゐるんです。いや何でもありません、一寸言つてみただけですよ。」と言ひ乍ら彼はピストルの箱を仕舞つた。それから若い役人に紙を乞ふて、それに二行ばかりペンで何か書き下したが、それを四つに疊んで、チヨツキのポケットへ収めた。そして、意味ありげに笑ひ乍ら、「ぢやあ、もう出かけませう。」と言つた。

「何處へ行くんです、一寸待ち給へ、本當にそんな事をするんぢやありませんか。」

「あれはただ戯談に言つてみたのですよ。僕だつて生きたいさ。それは安心してくれ給へ。……だが、君は傍へ退くといふことを知つてゐるかい？」

「何ですつて？ 傍へ退く？」

「道を譲るのさ。可愛い女のために、又憎い男のために道を譲つてやるのさ。つまり憎い奴が可愛いくなる爲なんだよ。で、斯ういふんだね、貴方がたはお二人で好きな處へいらつしやい、私は……」

「私はどうするんです？」

「それだけです。行きませう。」

「いや、僕はどうしても止める。一體何のためにモトクロエへ行くんです？」

「そこに女があるんですよ、それだけで澤山だ。」

「ねえ君、君はさういふ野蠻人だけれど、僕は昔から君が好きだから……何うも心配になるよ。」

「有難う。君は僕を野蠻人といつたね、あゝ野蠻人で澤山だとも。」

そこへ給仕が歸つて来た。そして隣の雜貨店では大騒ぎをやつてゐる、すぐに何も彼も運んで来る、と告げた。ドミトリイは、ベルホーチンを引ばつて、無理矢

理に表へ連れ出した。そして荷拵への差圖をするやら、取どめのない事を口走るやら、ベルホーチンが止めるのを無理に給仕に三鞭を飲ませたりした。

「時に君に訊くがね。」と彼は又不意に官吏に言ひかけた。「君はこれ迄一生の間に、何か盗んだことはないかい？」

「何といふ質問だね。」

「いや、他の事ぢやないよ、誰かのポケットから金を盗んだことがあるかと訊くんだよ。政府の金を盗むのはこりや當り前だ。何れ君もやつてるだらうがね。」

「酷いことを言ふね。」

「僕は他人の金子を盗んだかと訊くんだよ。ポケットから、裏口から。」

「子供のころ阿母の金をこつそり持ち出したことがあるよ。」

「それから如何したい？」

「何うもしないよ。三日後に良心に恥ぢて白状した。」

「それから？」

「勿論打たれたさ。何故そんなことを訊くんだい。君も何か盗んだのか。」

「あゝ、盗んだよ。」と、ミーチャは狡さうに瞬きながら云つた。「僕は九ツの年に阿母さんの金子を二十コベック盗んで、三日経つてから返したよ。」

斯う云ひ乍ら、ミーチャは不意に立ち上つた。

「旦那、未だ出かけないんですか。」と、馭者が嘸鳴つた。

「ああいくよ。」と、ミーチャは飛び出した。其處へ待つてゐたやうに番頭が勘定書を持つて来た。彼は百ルーブルの紙幣を三枚ほうり出し乍ら、馬車に飛び乗つた。が、そこへ不意に女中のフエーニヤが出て来て、足元にまつわりついた。「どうぞ御主人を助けて下さい。私が何も彼も云つたんですから。どうぞあの方をお殺し下さいますな、後生です、御願ひです。」

「ああ、わかつた！ 何も彼もわかつた。」とベルホーチシは叫んだ。「ドミトリイ

君、かうなればピストルを返さなくちやいけないよ。」

「ピストルだつて？ 僕は途中で汽車の中へでも捨ててしまふよ。」とミーチャは答へた。「ね、フヨーニヤ、俺が誰を殺すものか、馬鹿だな、それよりも今お前をひどい目に合はせたが勘忍してお呉れよ。俺を悪く思つてくれるな。」

馭者は馬に鞭をあてた。鈴はなり出した。

「左様なら！ おさらばだよ！」

「あいつもいい男だが、馬鹿だな！」と若い役人は後を見送りながら呟いた。「グーシーシャの前の男がもごつて来たと言ふ話を聞いたが……待てよあのピストル！ 構ふものか俺は彼奴の乳母ぢやないんだ、好きなやうにさせて置くさ、別にたいしたことにはなるまいよ。」

ミーチャの乗つた馬車は闇を突貫するやうな勢で驅けてゐた。彼はただ一目最後に女をみたいとそればかりを思ひ續けてゐた。彼の胸には前の情人に對する嫉妬も

なければ敵意もない。實際又その男をみたこともない。過去をかへりみると自分乍ら憐れになつて何も夜明まで待つ必要はない、このまゝ馬車から飛び降りてピストルの引金を引きたいやうな氣もする、が、ただ一目でもいいから女をみたい、遠くからでもいいから一目みたい……

馬車は、狂人のやうに神に祈り乍ら何か獨りで吠いてゐるドミトリイを乗せて、やがてモークロエへついた。その宿屋へは先に一度グルーシヤと来て底抜け騒ぎをしたことがあるので、亭主は彼を覚えてゐた。亭主の話によると何でもグルーシヤは二人の波蘭人と、丁度この家へ來合せたカルガーノフと云ふ若い士官(いつぞや僧院の親族會議へも出た)と、それに士官のつれて來た取巻きの老爺など四五人で酒をのみながらカルタを取つてゐるのださうだ。ドミトリイはジブシイの女を總揚にするどをいひつけて、それから女のある部屋の次の間へ自分を案内してくれるやうに頼こんだ。暗がりにも身をかくしながらそつと次の間をのぞき込んでみると、卓子の傍の

低い椅子に腰をかけてカルガーノフの手を取つてゐる女の姿が目に入つた。が、その顔は嬉しさうでない、困つて苛々してゐるやうにも見えた。長椅子には背の高いずんぐりとした波蘭人がパイプを啣へ乍ら腰掛けてゐた。何だかぶん／＼してゐる様子だつた。も一人の波蘭人はずぬけて背の高い男であつた。ミーチャは息をつめた。が、ちつとしてはゐられない。ピストルの箱を其處に置いて、全身冷めたくなるやうな氣がしながら、真直にその部屋へ入つて行つた。

『あ!』とグルーシヤは最初に彼を見付けて思はず聲を上げた。

ミーチャは例の大跨で卓子の傍へ近よつた。『諸君!』と大きな聲で一言づつ吃りながら云ひ出した。『私は……私は何でもないんだ。どうぞ心配して下さるな。』斯う云つて不意に女の方へ向ひながら、『僕もやつて來たよ、朝までここに置いて下さい。諸君、どうぞ僕も仲間へ入れて下さい。』

『此處は買ひ切りです、他にも部屋がありますよ。』とずんぐりとした波蘭人が云つ

た。

『なんだミーチャぢやないか、一體どうしたんだね。』とカルガーノフが引き取つて云つた。『まア此處に坐り給へ。』

『有り難う。僕は始終君のことを考へてゐたよ。』とミーチャは卓子越しにしつかりと相手の手を握つた。

『おい！ 君はかたく握るね、僕の手を握りつぶさうだよ。』と士官は笑つた。

『この人はいつもそんな風に握るんですよ。』とグルーシヤはミーチャの顔付きからすぐに喧嘩を始めさうにもないのを見てとりながら、愉快さうに口を出した。

『諸君私は。』と、ミーチャは再び波蘭人に話しかけた。『私は此處へ飛んで来たんですよ……私の最後の日、最後の時間をこの部屋で過さうと思つて……ね、一緒に飲みませう。今にいろんな御馳走が來ます、ジブシイも來ます、一ツ大騒ぎに騒がうちやありませんか。』

彼はもつとく何か云ひたかつたらしいが、聲が咽喉につまつて出なかつた。波蘭人はミーチャの手に持つた札束に眼をつけながらその顔を見つめてゐたが『我が女主人公さへ許されるならば！』

『何です、おかしい言ひ方をするのね。』とグルーシヤがすぐにさへぎつた。『ミーチャお坐りなさい、あなたは又私をおごかしやしないでせうね、驚かさなげや私はあなたが來てくれたのが嬉しいのよ。』

『貴女を驚かす？』とミーチャは飛び上つた。『ね、ね、あなたは僕にかまはずにあなたに行く道を行つて下さい、決して邪魔はいたしませんよ。』

斯う云つて彼は一同を驚かせた。恐らくは自分でもびつくりしたらしい。彼は椅子に身をなげて壁の方へ顔を向けながら、椅子の背を握つたまま、わつと泣き出したのである。

『まああなたはどう云ふ人ですね。』と女は非難するやうに云つた。『しつかりなさ

いよ。何を泣くんです、何か泣くことがありでもするやうにね。」

「僕は……僕は泣かない……よし、今晚は！」と云ひ乍ら彼はすぐに立ち上つて不意にかすれたやうな笑ひ方をした。

「そら今度はまた……まあ浮きく／＼なさい、浮きく／＼なさい！」とグルーシヤは勵ますやうに云つた。「わたしあんたが来てくれたので本統に嬉しいわ、全く嬉しいわ。あんたわかつて、ミーチャ、私本統に嬉しいつて云つてゐるのよ！ 私この人に一緒にゐてもらひたいの、若しこの人が歸れば私も歸つてよ。」と彼女は一同に向つて命令するやうに斯う云つた。

「何でも女主人公の命令は法律です。どうぞ貴方仲間へ入つて下さい。」

ミーチャは長い演説でもしようと飛び上つた。が、ただ、「の、飲みませう。」と云つただけだ。

「ねミーチャ、よく三鞭を持つて来てくれましたね。私達は恐ろしく滅入つてゐた

ところなんですよ……一體あんたは散財に來たの、ま、そのお金をかくしにしまつたらどう！ 一體何處からそんなに手に入れたの。」

ミーチャはそれまで始終手に札束を持つてゐたが、あわててポケットへ突込んだ。そして顔を赤らめた。丁度其處へ三鞭が運ばれて來た。ミーチャはそれを各々のコップへついで廻りはしたけれど、「おい、もう一瓶だ。」と云ひ乍ら、皆と杯を合せることゝもわすれて一番先に飲み乾して了つた。彼の顔は急に一變してしまつた。今までの眞面目な悲し氣な表情はすっかり消えて子供のやうな顔になつた。そして何も彼も忘れたやうに座中を見廻した。波蘭人の鬘をかぶつた勿體振つた様子も何となく彼には偉らさうに思はれた。何も彼も正當で別に云ふところはないやうな氣がした。犬のやうな服従の氣分に制せられてあらゆる競争の念は絶てしまつた。グルーシヤの心持だの、變な言葉の端々などには氣付さへしなかつた。彼が了解したのは女が自分に親切で、傍に坐らして置いてくれると云ふだけだ。坐は白けはてて

ゐた。取巻きの爺が馬鹿氣た歌を唄つたり、おかしな馬鹿話をして皆を笑はせようとしたが、どうしても浮き立たなかつた。笑つたのはミーチャ位のものであつた。カルタが持ち出された。最初はミーチャが勝つたが、次には皆波蘭人に持つて往かれた。ミーチャは二倍かけた。それも即坐に持つて往かれた。むきになつて、また二倍かけた。それも取られた。

『もう止めろ！』と不意にカルガーノフが喚鳴つた。

『いや、二倍だ、二倍だ』とミーチャはわめいた。『もう二百ルーブル取られたが、これから又二百ルーブル取られるんだぞ。』

斯う云つて彼がポケットから札束を取り出さうとするのをカルガーノフは兩手で押へた。『もう止すんだよ。』と叱りつけるやうに云つた。

『どうして？』とミーチャはあつげに取られて云つた。

『譯があるんだ。唾でもはいて歸つておしまひなさい、わかつたでせう。餓はもう

勝負をさせません！』

『こりやア妙なことを仰有いますね。』と波蘭人は深く面目を傷つけられたやうに座から立上つた。『聞き捨てには成りませんよ。』

『怪しからん。』と、も一人の波蘭人もカルガーノフに喚鳴りつけた。

『生意氣な、喚鳴るのはお止しなさい。』とグルーシヤは叫んだ。『本統に印度産の雄鶏かなんぞのやうに！』

ドミトリイはわかるがわる人々の顔を見くらべてゐた。とグルーシヤの顔面の或物が突然彼の心を打つた。その一瞬間に全然新しい何物かが彼の腦を掠めた——それは奇怪な新しい想念であつた。——

『是非貴方にお話したいことがある。一寸顔を貸して下さいませんか。』と無理矢理にづんぐりした波蘭人を次の間へつれて行つた。ひよる長い波蘭人も後から隨いて來た。彼は其處で、三千ルーブル出すから何にも云はずに此地を立ち去つて呉れな

いかと、相談を持ちかけた。波蘭人は少時考へて居るやうに見わたが、やがて決心の色を面に表して、

『で、其金子は？』と訊いた。

『五百ルーブルは即座に渡します。後の二千五百ルーブルは明日まで待つて下さい。明日中には間違ひなくお渡ししますからね。』

波蘭人は顔を見合せたまゝ目配せした。

『七百ルーブル、七百ルーブル！ それだけ即座に渡しますよ。』とミーチャは形勢非なりと見て、遮てて言った。『君ごうです。信用出来ないですか、今すぐ三千ルーブル耳を揃へて手渡す譯にはゆきませんよ。然し僕は必ず上げます。明日にも彼女のところへ取りにいらいしやい……今ここには三千ルーブル持ち合はせはありませんが町の家にあるんです。』とミーチャは續けたが、一言毎に怖氣づいて意氣の銷沈を感じながらしごろもごろにかう云つた。『全くです、あります、隠してあります』

よ……』

『ふふむ、それだけか。』と波蘭人は床に唾を吐いた。『馬鹿にするない。』

『ちや貴方がたはグルーシヤから最つとむさぼり取らうとしてゐるんですね。』

『こりやア人を侮辱するものだ。』と、波蘭人は室の中から飛び出した。『グルーシヤ、私は此處へ過去のことは忘れて、何も言はない積りで來たが、斯う幾人も情夫を見せられては我慢が出来ないよ。今此の紳士は私に三千ルーブル出すから此處を去つて呉れと頼んだ。』

『わ？ この人が私の身の代だつて。』とグルーシヤは叫んだ。『ミーチャ、本當なの？ どうしてそんな失禮なことを……一體私が金で賣り買ひされる女だと思つて？』

『諸君、諸君。』とミーチャもわめいた。『この女は純潔だ。光り輝いてゐる。僕は決してこの女の情夫になんかなつたことはない！ それは出鱈目だ……』

『何だつてあんたは生意氣にも、此人に對してわたしの辯護なんかするんです？』とグルーシヤは甲走つた聲でかう云つた。『わたしは徳が高く、純潔なんぢやないんですよ。又サムソノフが恐いからでもないわ。只此人に威張つてやりたかつたからよ。此人に會つた時畜生と云つてやりたかつたからよ。それで一體此人はあんたから金を取つたの？』

『あゝ取り掛けたんだよ、取り掛けたんだよ！』とミーチャは喚いた。『只三千ルーブル一時に欲しかつた所へ、僕が七百ルーブルの手附金しか出さなかつたもんだから……』

『さうでせうよ。わたしが金を持つてるといふ事を嗅ぎ附けたもんだから、それで結婚しようと思つてやつて來たんだ！』

『貴方アグリツピナ。』と紳士は叫んだ。『わたしはあなたと結婚する積りでやつて來たのです。所が會つて見ると以前とは丸で違つた、我儘な恥知らずになつてしま

ひましたねえ。』

『は、元來た道へ、とつと歸つてしまふがいい！ 今わたしが追出してしまへと云ひつけたら、お前さん達は早速追出されるんだよ。』とグルーシヤは前後を忘れて叫んだ。『あゝ私は馬鹿だつた。馬鹿だつた。五年の間辛抱するなんて！ がそれはこの人の爲ぢやない、ただ、私の憤りの爲だつた。あの人はこんな人間ぢやなかつた。こんな人間なもんか……あゝ私は馬鹿だ！』

かう言つて、兩手で顔を仰へ乍ら、倒れるやうに椅子へよりかゝつた。その時隣の方に集つたジブシイの群が急に喧しい舞踏曲を打ち出した。

宿の亭主は客のわめく聲を聞いて、隣の室からはいつて來た。『何です、何です？ 喧嘩ですか？』とひよろ長い波蘭人を突倒すやうにし乍ら『貴方は今何んなカルタ札を使ひました？ 私の上げたのは背後へ隠したんでせう。胡魔化し札を使ふのは賈札を使ふのと同罪ですよ。』かう云つて長椅子の座布団の下から口を開けないまゝ

のカルタ札を取出して来て『此處に私の札がありますよ。』

『私も二度札を揃り代へるのを見たよ。』とカルガーノフも叫んだ。

『あゝ、耻知らずな、耻知らずな！』と、グルーシヤは顔を眞赤にして、兩手を握りしめながら叫んだ。『この人は何て人になつたんだらう。』

『何を、賣女め！』と、ひよろ長い波蘭人は、拳を擧げて打ちかゝらうとしたが、ミーチャは即座に兩手で抱きすくめながら、次の間へ押出した。直ぐに又歸つて来て、『貴方もこの場を外された方がお爲めでせう。』とづんぐりした波蘭人に云つた。

波蘭人は努めて威嚴を保たうとしながら、次の間へ這入りかけたが、戸口で振返つて、グルーシヤに言つた。『私といつしよに來るならいらつしやい。來なけりやおさらばだ。』

斯うなつてからまだ女がついて來るものと思つてゐるのも又一種の性格である。後は又お祭騒ぎになつた。グルーシヤも先に立つて飲みはじめた。誰でも來るも

のは來放題、飲み放題、ミーチャもはしやぎ切つて騒ぎ廻つた。グルーシヤは椅子にかけてたまゝ、皆の騒ぐ様子を見てゐたが、たうとうミーチャの手を掴んで引寄せた。彼女も酔つてゐるらしい。

『あんたが今此處へはいつて來た時の様子つたらなかつたわね。私はびつくりしましたよ。あんた本當に私をあの男に呉れてやる積りでしたの？』

『私は貴女の幸福を邪魔したくないからさ。』とミーチャは嬉しさに答へた。

『で、どうして私が此處へ來てゐることが解つて？ 誰から聞いて？』
ミーチャは途切れ〜に宵からの始終を語つた。が、妙に苛々して、急に話を止めた。

『如何したのよ、そんなに怖い顔なんかしてさ？』

『なに、何でもないんだ……ただ病人を殘して來たからさ。あの病人が癒りさへすりや私は十年壽命が縮まつても構はないよ……』

『そんなことは構はないでせうさ。それよりか、貴方は本當に明日自殺しようと思つたの？ まあ、馬鹿な子だね、何のためにそんなことをするんだらう。』と彼女は舌つたるい調子で言つた。『私はその馬鹿なところが好きさ。明日私はあなたにふことがありますよ。いね、今日ぢやない、明日！ 明日ですよ。さあ、行つてもつと騒いでいらつしやい。』

が、又彼女は直ぐに心配らしくミーチャを側へ呼び寄せた。

『何だか悲しそうな顔をしてゐるのね。何うも變だわ。好うござんすこと？ 私はこん中で一人愛してゐる男があるんですがね、誰だかあててごらん下さい。……ああ可哀さうに、酔拂つて寝て了つたよ。』

カルガーノフは本當に酔つて苦しうにしてゐた。やがて長椅子の上に倒れたまま、ついうとくとした。彼の美しい顔は寧ろ青白く見えた。取巻の爺さんはジブシイの娘ごもの中を何時迄も離れることが出来ならしい。その邊をうろついて、

彼方此方と酒を注ぎ廻つてゐた。

ミーチャは頭が燃ゆるやうな氣がした。一人外の廊下へ出て涼しい風にあたつた。暫らく闇の中に立つてゐたが、不意に兩手で頭を掴んだ。『俺も自殺するとしたら、どうして今しないのだ？』彼は一瞬間不決斷のまま立つてゐた。一二時間以前此處へ飛んで來た時は、不名譽と自分の犯した盗みと、あの血——あの血に追はれてゐた。あの時ならまだ死に易かつた。少くとも死が避け難いやうに思はれた。が、今は違ふ。第一の悪夢は跡方もなく消え失せた。女の正當な戀人だと思つたのは飛んだ滑稽な結末を告げた。女もそれを耻ぢてゐるらしい。今こそは自分も生きて行かれる。ごんな幸福な目にも合はれる。ああ、あの老人が生きてさへゐてくれたら！

が、あの女の愛の一瞬間は、一生の殘部を値打してゐはしないか。この儘死んだ所で何の悔があらうぞ！ あの女へ、あの女の側へ！ あの女を見て、あの女の聲を聞いてさへゐたら、何にも思ふ所はない——たとへ一夜でも、一時間でも、一瞬

間でも！

ミーチャは又元の部屋へ馳せ戻つた。が、女はそこにはゐなかつた。只カルガーノフばかりが一人長椅子の上に眠つてゐた。ミーチャは又帷幄の後を覗いてみた。女は其處にゐた。寢臺の上に兩手を投出したまま、一生懸命に泣聲を立てまいと、聲を殺して泣いてゐる。で、ミーチャの姿をみると手招ぎした。そして、ひしと男の手を握りしめた。

「ミーチャ、ミーチャ、私はあの男を愛してゐたのよ。この五年間といふもの、本當にあの男を愛してゐたのよ。あの男を、あの男を！ それとも、たゞ口惜しいといふ心持だけを愛してたんでせうか？ いね、あの男を愛してたんだわ！ だつてね、ミーチャ、私はまだ十七だつたんですもの、あの人はそりや私に優しくしてくれたことよ。そして陽氣な人だね。よくわたしに歌を唄つて聞かしてくれたわ。……それとも私が馬鹿な小娘だつたから、たださう思はれただけなのかしら……それなのに

今はまあどうだらう！ あれはあの人ぢやない、丸つ切り人が違ふわ、顔まで違つてゐるわ。あれはね、家内があの男を悪くしちやつたんだわ。あの男が私を棄てて結婚した家内ね、それがあの男を別人にしてしまつたんだわ。ミーチャ、何といふ耻かしいことでせう。私は一生涯の間耻かしいわ。あの五年は呪はれたものだ！ 呪はれたものだ！」と彼女は再びさめく泣き出した。けれど一生懸命ミーチャの手に縋りついて、放さうともしなかつた。

「ミーチャ、行つちや厭ですよ、一言あなたに言ひたいことがあるからね。」と、女は不意に顔を擡げて囁いた。「私はこの中に愛してる男が一人あるんですよ。誰だか當てて御覽なさい。當てなくちや可厭よ。」

彼女は眼に涙を一杯溜めたまゝ、笑つて見せた。「ね、あなたは先刻這入つて來た時、何だかびくびくして居たわね。何を怖がつてゐるんだらうと、私は不思議に思ひましたよ。まさか彼奴等ぢやない。あなたは他人を怖がる男ぢやない。屹度私だ、

私を怖がつてゐるんだと思ひました。ね、ミーチャ、あんたを知つてから、如何して外の男を愛することが出来よう？ 勘辨して下さいますか、勘辨して私を可愛がつて下さいますか。さア、私に接吻するのよ、もつと、もつと。最つと強く接吻するのよ。宜しい。私はこれから奴隷になるのよ。一生涯奴隷になるのよ。奴隷になるのは好いものだ。接吻して下さい。殴つて下さい。私を虐待して下さい。好きなことを爲して下さい……だが、一寸お待ちなさい。後でいろ／＼話があるからね。」と男を突きやつて『さア今は彼方へ行つて酒を飲むのよ、飲むのよ。』

斯う云つて女は明るい室へ飛び出した。ミーチャも後から随つて行つた。

『如何なるものか——如何なつても構はない。此一瞬間の爲めに全世界でも呉れて遣る。』と彼は云つた。グルーシヤはなみ／＼と注いだ三鞭を一息に呑み乾した。直に又酔つぱらつて來た。頬はほてり、唇は燃わ、濕ほひを持つた眼は情熱に輝いてゐる。カルガーノフもそれを見て一種の衝動を感じた。

『ね、あんた、私はあんたが眠つてゐるうちに接吻して上げたが、おぼわて被坐しやるの。』と、女は重い口で云つた。『あ、私は酔つた。ね、ミーチャ、私は尼寺へ這入るのよ。明日尼寺へ這入るのだから、今日は踊るのだ。神様は何でも宥して下さるのよ。私が神様なら誰でも宥してやつてよ。あ、世間の人は皆善い人ばかりだ。みんな善い。何んな悪い人でも善い。みんな善くて悪い、悪くて善いのだ。ミーチャ、私は踊つて見せるよ。』彼女は本當に踊り出した。右の手に手帛の隅を掴んで、ひら／＼と踊るのである。

『あ、苦しい。』と、彼女は息の切れるやうな聲でいつた。『ミーチャ、私を連れて行つて下さい。』

ミーチャは直ぐに馳せ寄つて、大切な獲物のやうに抱ながら、帷幄の後へ連れて行つた。そして寢臺の上に寝かしたま、その傍に跪いた。

『ね、ミーチャ、此處は汚ないから遠い遠い所へ連れて行つて下さいよ。』と、グル

「イヤはやつと物を言つた。『これからは清浄にして、正直に暮らませうね。畜生の真似なぞ爲ないで、立派に……連れて行つて下さいよ。私はこんな所にたたくないから遠い〜所へ……』」

「あゝ、さうだ、屹度左様するよ。」と、ミーチャは女の腕を締めながら云つた。「私はお前を連れて逃げるよ……あゝ、あの血のことさへ判つたら、私の一生と一年と取換へても可い。」

「何の血？」と、グルーシヤは訊いた。

「何でもないよ。」と齒を喰ひ縛りながら呟いた。「グルーシヤ、お前は正直に爲よと云ふがね、私は盗人だよ。あのカーチャの金子を盗んだ……ああ、可厭だ！」

「カーチャから、あの女から？ いね、貴方は盗んだのではありませんよ。お返しなさい。私の金子でお返しなさい。私の物は皆あなたの物なのですよ。二人であの方へ許へ行つて、一緒に跪いて謝罪つて來ませうね。それからこんな土地を去つて仕

舞ふのよ。あの女が勘忍して呉れなければ、呉れないでも關はないわ。あの女を愛しては可厭よ。私を愛して下さい、あなたがあの女を愛するならば、私は締め殺してやるから好い……針で兩の眼を突つき出して遣るよ。」

「私はお前を愛する、西伯利亞へ行つても愛する……」

「まあ、西伯利亞だつて？ 西伯利亞でも關はないわ。私は何處へ行つたつて關はない。西伯利亞で働くのよ……雪の中で働くのよ……如何したんだらう、鈴の音が聞えてよ。誰か來るのか知ら？」

彼女は勞れて眼を瞑つた。其儘うとくと寝入つた。ミーチャも女の胸の上に頭を伏せた。實際鈴の音は家の前で停つて、隣の間の騒々しい物音も確と止んで仕舞つた。急に家の中が森とした。グルーシヤは不圖眼を開いた。

「如何したんだらう、私は眠つたのか知ら。」と、四邊を見廻してゐたが、不意に吃驚したやうな顔をして、『ミーチャ、誰か覗いてゐるよ。』

ミーチャは飛び上つて、つか／＼と隣の間へ出て行つた。が、急に足が萎むたやうに直立した。室は警吏で一杯であつた。先づ署長のミハイル・マカロフツチの顔が見えた。續いて検事補も居れば豫審判事も居る。後には巡査が一杯押かけてゐた。「如何したんです、貴方がたは？」と、ミーチャは何やら言ひ掛けた。が、不意に我を忘れて、大きな聲で呼ばはつた。

「あゝ、わーかーりました！」

若い検事はミーチャの傍に歩み寄つて、「あゝ、此處へ来て下さい。貴方は充分に申開きを爲さなければ成りませんぞ。」

「老人！」と、ミーチャは狂人の様に叫んだ。「あゝ、老人の血……解りました。」

斯う云つて、彼は鎌で刈られた様に椅子の上に倒れた。

ミーチャの言葉を聞いて、警吏どもは色めき立つた。判事はなほ傍へ寄つて、「カラマゾフ中尉、貴方は今夜お父さんのフョードル・パブロフツチ・カラマゾフを殺し

た殺人犯人として檢舉されるのですぞ。」

ミーチャはそれを聞いて居たが、何にも解らなかつた。彼は只大きな眼を睜いて皆の顔を見廻してゐた。

八 悪魔の仕業

老僕グレゴリーの妻のマルファは宵からぐつすり寝込んでゐたが、不意にスメルチャークのけたたましい癡癡の叫び聲で眼を覺した。急いで彼の部屋へ駆けつけてみると、病人は暗がりの中に身を藻掻いて苦しんでゐる。で、自分も聲を擧げながら良人を起しに行つたが、寢床は空になつてゐた。彼女は又梯子の口へ駆け出して、怖々良人の名を呼んでみた。返辭はない。が、暗い庭の中から人の呻き聲が聞えて來た。

『マルファア！ マルフアア！』といふ様にも聞ゆる。

『如何せう、お爺さんだよ。』彼女は仰天して怖々ながら聲のする方へ行つてみた。かうして彼女はグレゴリイを發見したのである。が、彼は毆られた石垣の下にはゐなかつた。そこから十間も離れた所に倒れてゐた。恐らくそこまで匍つて行つて、氣絶したまま倒れてゐたらしい。見ると、彼は身體中血で被はれてゐる。彼女は聲を限りに喚いた。不圖、主人の室の窓が開いて蠟燭の火の點つてゐるのを見て、そちらへ駆けつけて行つた。と、主人も床の上に仰向けに倒れて、寝巻や白いシャツが血でぐつしよりになつてゐる。蠟燭は床の血とフヨードルの死顔を靜に照してゐた。マルファアは仰天して庭から駆け出した。そして隣家の門を滅茶苦茶に敲き乍ら聲も切れ切れに助けを求めた。

皆でグレゴリイを小舎の中へ運び入れた。スメルチャークフは相變らずそこに口から泡を吹出したまま藻掻き苦しんでゐる。額を濡れ手拭で冷してやると、グレゴ

リイは直きに息を吹き返した。そして、

『御主人は殺されたか。』と訊いた。

皆は又主人の室へかけつけた。今度は窓ばかりでなく庭へ通ずる木戸口も開放されてゐることに氣がついた。この戸は平常閉め切りになつてゐるのである。それを見るとき、皆は後難を恐れて中へはいらなかつた。グレゴリイの云ひついで、マルファアは早速警察へ訴へて出た。

すると丁度すぐその後へ、官吏のベルホーチンも屈けて來た。彼はミーチャに分れてから玉突場へ行つたがそこで仲間の者にその話をする、皆は、不審がつた。今時あの男がそんな大金を持つてゐる筈はない、親父の金を盗んだのぢやないか、といふ事になつた。彼はそれを聞くと表へ飛び出してグルーシヤの家を訪ねた。フヨーニヤに委細を聞いた。ハフラークフ夫人の許も訪ねた。そして一伍一什の話をすると、夫人の顔色はすぐに變つた。『如何しませう、あの人はお父さんを殺したの